

第二編  
自然



# 第一章 地 誌

## 第一節 位置・面積

滝川市は北海道の中央西部にある空知地方の中央部に位し、石狩川とその第一の支流である空知川の合流地点から北東に位置する地域である。

東は音江山中腹を東端として西南方向に流れるポンクラ川及び空知川によって赤平市と境し、南は空知川を隔てて砂川市と相對し、西は石狩川を挟んで樺戸郡新十津川町及び雨竜郡雨竜町に接し、北は石狩川を境に雨竜郡妹背牛町と須麻馬内(スママナイ)川を以って深川市と接している。

東端	東経 一四二度五分二秒	赤平市界
西端	東経 一四一度五二分五秒	樺戸郡新十津川町界
南端	北緯 四三度三一分三七秒	砂川市界
北端	北緯 四三度四〇分一一秒	雨竜郡妹背牛町界
東西	一六・九キロメートル	
南北	一五・八キロメートル	
面積	一一六・三四平方キロメートル	

・地目別面積

(昭和五十二年現在)

## 第二節 地 勢

地 形 滝川市は石狩平野の北東部に位置するため石狩川氾濫原及び段丘堆積層からなる極めて低平な地帯であって、その土壌も肥沃である。

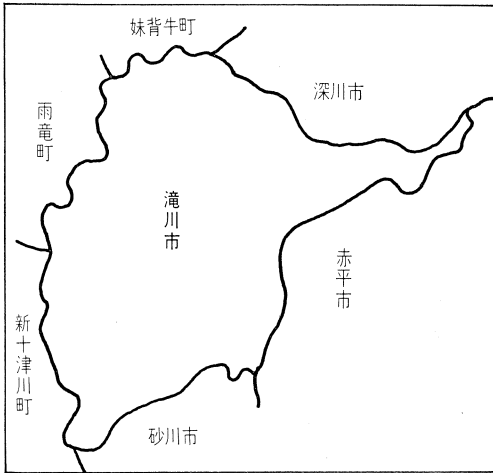
地域の西側界は我が国屈指の長流石狩川が屈曲蛇行して、上流からの土砂などの流出物を堆積させた平地の流域に数多くの三日月湖(河跡湖)を残し南流している。また南側界はいくらか自由蛇行の形をとった空知川が東から西方に流れ、平地及び段丘を作って石狩川に注いでいるが、滝川市の地形はこの両河川の影響によることが極めて大きい。

したがって地域の地形としては南西部が一番低地帯であり、ここからしだいに東北方向に標高が大きくなっており、東端地では最高地区となっている。

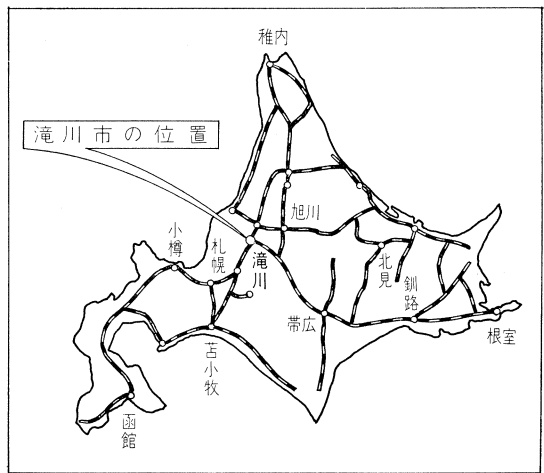
石狩川と空知川の合流地点は市の南端に当たるが海拔二三メートルであり、そこから約一六キロメートルの北端である石狩川の上流地点は海拔三二メートルと九メートルの差しかない。また石狩川及び空知川流域の六キロメートルは高位・中位・低位の三段階段丘堆積層及び沖積層に区分されるほとんど平坦で起伏の少ない平野とな

構成比%	宅地	畑	田	山林	牧場	原野	雑地	その他	計
六・二	七・〇	二四・九	四〇・四	一〇・二	七・五	五・三	六・四	三・九	二六・四
三・七	三・〇	三・七	八・九	六・五	四・六	五・九	二〇・六	二〇・〇	

滝川市近隣の市町



北海道における滝川市の位置



っており、地域の約八五パーセントは海拔一〇〇メートル以下である。地域の南側に市街地区が発達し、平野の各地に住宅が点在しているが、水稲耕作による美しい田園風景を見ている。

この平野に続いた北東方向に単調な段丘地が石狩川に平行して連なっているが、後背地区はしだいに起伏に富んだ丘陵地となり、続いて山地となっているが、最高地点では海拔七四六メートルに達するイルムケツ山系の峻しい高地となっている。

中心市街地の中央を函館本線並びに国道一

二号線が縦断して石狩川に沿って南北方向に走り道南・道北に通じている。また根室本線並びに国道三十八号線がそれぞれ市街中心部から分岐して、空知川に沿って道東に走っており、西方には国道三十八号線の延長路線とも言える道々滝川浜益線が通じている。

滝川市域に連なる地形については石狩平野の中央を流れる石狩川の東側に当たる滝川地方の地形と相対峙しているかのような西側の地形である。

すなわち西側は石狩川流域の平原に続いて標高二〇〇〜三〇〇メートルの単調な丘陵地が連なっているが、その背後はるかに高山がそびえている。

滝川市から眺め親しみのある夫婦山(二六四メートル)は二瘤駱駝の背を思わせる。さらに南西にピンネシリ(一、一〇〇メートル)の雄姿を仰ぎ、西方はるかに大滝山(一、〇三七・八メートル)、南暑寒岳(一、二九六・三メートル)、群別岳(一、三七六・三メートル)、暑寒別岳(一、四九一・四メートル)、浜益岳(一、二五七・七メートル)、雄冬山(一、一九七・六メートル)など一、〇〇〇メートル以上のいくつかの無名山が連なる暑寒別連峰が望まれる。

南の方向には空知川を隔てて南西に石狩平野が開けているが、南側は新第三紀鮮新世の比較的小高い丘陵地が迫っており、続いて古第三紀石狩層群の標高三〇〇メートル級の山岳地帯であるが、これは挟炭層の多い石狩炭田とよばれる地域である。さらに背後には夕張山脈、日高山脈が連なる高山帯となっている。

北側については石狩川上流地域に当たり平野となっているが、石

狩平野の北端部であるため、はるかに山並みが望まれる。

また東側については地域の東部に当たる音江山(七九五・六メートル)、沖里河山(八〇二・一メートル)、八〇〇メートル山、イルムケツ山(八六四・五メートル)などからなるイルムケツ火山(休火山)に接しているところから高山帯があり、続いて富良野盆地(北海道の中心地)、さらに続いて真東の方向に北海道の屋根とよばれる大雪山系がある。

なお、市内各地における標高を掲記すれば次のとおりである。

中島町	二五メートル	国道一・二号三丁目交差点四二・二メートル
中央バス前交差点	二七・五メートル	原々種農場 五二メートル
東町	三〇・七メートル	国道一・二号四丁目交差点五〇メートル
東滝川	四三メートル	〃 一一丁目交差点三七・七メートル
西町	二七メートル	南地区福祉会館前九丁目三一メートル
第一小学校前	三九・四メートル	北地区福祉会館前一六丁目三六メートル
泉町児童公園	三四・二メートル	北高校・リング試験地間道路七八メートル
西滝川	二七・六メートル	東陽地区福祉会館前国道五六・七メートル

**地形の成因** 滝川付近の地形が現在のようない地形を形成したのは約七、八千年前ごろからと推定される。

ではそれ以前はどのような地形であったかということであるが、地質学の研究調査の結果をみると詳細には判明しないまでも、だいたい次のように述べることができる。

最近の研究によると地球の誕生は五〇億年前などといわれるが明らかではない。地質学では無生代・古生代・中生代・新生代と四大区分の編年をとり、地質年代として次表に示す細分をしている。無生代については想像の域を出ないが、日本では古生代シルリア紀以後(約四億二千万年前)からの地層帯とされているようである。

この時代の日本列島は海の底にあった。ヨーロッパからヒマラヤを通り東方にかけて海が広がり、いろいろな生物をはぐくみ、堆積物が地層を形成させ日本列島の骨格をつくる岩石となった。それは砂岩、粘板岩、石灰岩などに海の生物を含み、化石をはさんでの岩石が全国的な陸地の基盤となっており、そこから判断される。

地質年代		(単位:100万年)	
新生代	第四紀	現世(沖積世)	0.01~0.008
		更新世(洪積世)	約1
	第三紀	鮮新世	13
		中新世	25
		漸新世	36
		始新世	58
	中生代	白亜紀	135
		ジュラ紀	181
		三疊紀	230
		ペルム紀	280
石炭紀		345	
デボン紀		405	
古生代	シルリア紀	425	
	オルドビス紀	500	
	カンブリア紀	540	

日本列島がいつ海から顔を出したかは詳らかでないが、中生代の終わりに陸地が増大して、新生代に入るところには陸地が増大していた

ようである。

その後、隆起・沈降を繰り返し列島の形も様々に変化したが火成活動も活発であった。この滝川市の近くでは石狩川の西部に当たる浦臼、新十津川の隈根尻層群は火山岩で約一億年前のもののようにあり、滝川側の土地基盤は水成岩であることから滝川は海の底であったことになる。滝川市の地下深く眠るこの地質は隣接する産炭地帯の地表となって現れている古第三紀石狩層群に当たり、約六千三百万年から三千六百万年前に当たる地層である。

この地層の調査によると瀕海性層と淡水性層が互層となるもので、その中に炭層がある。すなわち海から陸になり、また海となる輪廻が識別できるわけで、これが大きく分けて四輪廻となっている。

このように隆起、沈降を繰り返す中に火成活動を伴い大地がゆれ動き、地殻の変化による褶曲（しゅうきよく）、地殻運動の結果強い横圧力が働いて地層が波うつ形となる）による造山・逆断層がこの地方に起きているが、第三紀の終わりごろ（約一千万年前）も滝川は海であった。

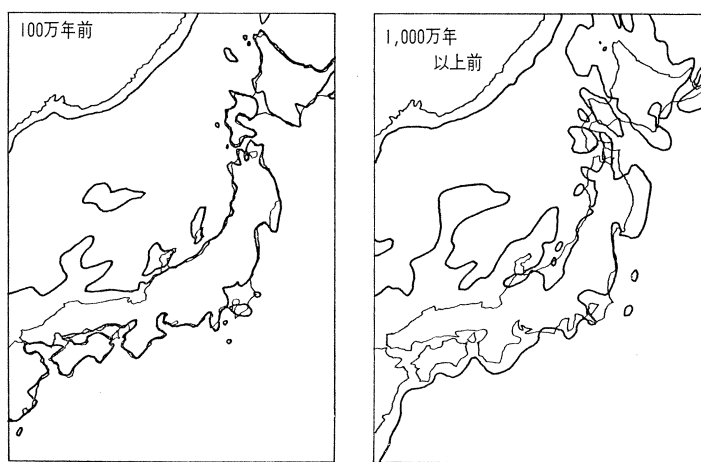
この時代の日本列島は築地書館刊の「日本列島地質構造発達史」に図示されており、この古地理図による日本列島の地形を以て想像できない変わったもので、あたかも水の上に石油の雫をたらしめた流動的な地形であり、これが日本列島の胎生である。

第四紀洪積世（約百万年前から）になると日本列島もまた北海道も今の形にやや似たものとなった。

石狩湾と苫小牧を結ぶ低地帯は海峡として北海道は東と西の二つの島に別れている。この時代はまた初期火山群の活動期で西の方ではニセコ・駒ヶ岳・恵山などで、東の方は阿寒・十勝岳・暑寒別な

どが盛んな噴煙火山活動を繰り返していた。

日本列島の生い立ち (1)



＜英文版「日本列島地質構造発達史」(築地書館刊)＞

地表の変化はこれだけではなく造陸運動による大地の隆起・沈降これに伴う溪谷の発達、河川・海などでの沈澱物の堆積など複雑な因子によりさまざまな変容をみせる。

現滝川市域の地表は新第三紀（二、〇〇〇万年前）から第四紀洪積世の間に広く堆積層をなした滝川層である。新第三紀のものは地層の厚さ三〇〇メートルで東は芦別市新城から空知川右岸一帯、深川、さらに砂川・歌志内にも広く分布している。

この洪積世には四回にわたる氷河期がある。すなわちギュンツ・

ミンデル・リス・ヴェルムとよばれるもので、氷河期と氷河期との間を間氷期といわれるが、氷河期と間氷期すなわち寒冷期と温暖期とは周期的に交互に現出し、現代はヴェルム間氷期の中間であるといわれる。

氷河期には蒸発した海水が氷雪となって陸地に堆積して氷河となり、海では氷山となるため海水が減少して現在の海水位を基準にして一〇〇メートルも下がり、温暖期には数十メートルも上がるとい

う。  
また第四紀に入る前後に地形に大きな変化を与えているのは火成活動で、玄武岩からなる溶岩の噴出があった。市の南東方向に見られる砂川市の石山（二三七メートル）や歌志内市の神威岳（四七七・七メートル）。石狩川の西方にある新十津川町の小鷲峻（しょうしゅん）山（四二二メートル）などである。

火山活動が終わって第四紀洪積世（二〇〇万年前）からは、堆積した砂泥・礫岩が隆起した段丘堆積となっていてのが現在の地表で地域の大部分を占めているのである。一回目の部分が高位段丘堆積層となり、さらに長い間の堆積物が続き二回目の隆起で中位段丘、次に八丁目以南に見られる低位段丘となるが、そのころ滝川近辺を大きくゆれ動かす大火山の爆発が起こった。それは滝川市の東部地域が含まれるイルムケップ火山群の噴火と溶岩の流出である。

滝川層に覆われた平坦な地であった滝川市丸加山地域から赤平市赤間、芦別市上班溪、新城、深川市吉住・音江・西沖里河を結ぶ区域の中心地点からまず最初に噴出したのは沖里河鉾泉の沢溶岩である。

次に八〇五メートル山、続いて最大の溶岩を噴出させたイルムケップ山、続いて沖里河山、八〇〇メートル山、最後が音江山でこの溶岩が市域の東端部分に当たるものである。

イルムケップ火山が噴出した碎石や流出した碎屑物の堆積は火山を中心に直径二〇キロメートルに及ぶ前述の地域で、市域では丸加山放牧場展望台付近から以東の区域がこれに含まれる。

この火山もおさまり二万年前の洪積世の終わりがこの日本列島は現在の地形に近く細長い帯状に地続きになっていたという。

#### 第四紀現世（二万年前）

になるとまた日本列島は寸断され、北海道の低地は海となっており滝川市の山地を除いては当然水の中であった。

その後には隆起があつて

石狩低地帯では千歳・苫小牧間の陸地化、続いて石狩平野の陸地出現となった。このころになると日本列島も現在の地形と変わらないものとなった。

ただし、局地的には変化があり滝川市域では空知川北岸の東一丁目から東滝川の台地が沖積段丘堆積層であり、低地を流れる石狩川と空知川が上流からの土砂搬出を進ませさらに氾濫による氾濫原堆積層を形成させて大平原を作り現在の滝川の地形に至ったのである。

日本列島の生いたち (2)



## 第三節 地質

滝川市の地質については前節の地勢で述べた成因によってもわかるとおり、表土については第四紀に属する地質地層からなっており、その下層は新第三紀鮮新世深川層と古第三紀石狩層群であり、さらに深部の基盤となるものについては白亜系の地質と推定される。

地質地層構造をより詳しく知るには一地点の調査では解明できないものであり、市周辺の地質との累重関係を明らかにする必要がある。

滝川市とその周辺の地表地質については石狩川の東西に大きな差異があり、又空知川を挟んで南北にも差がみられる。すなわち石狩川と空知川の合流点を中心として東西に切り、南北に分けた四つの区域に分けることができる。

- (1) 北東地域（滝川地域）では第四紀層を主とする
- (2) 南東地域（砂川・歌志内地域）では古第三紀石狩層群を主とする
- (3) 西北地域（新十津川・雨竜地域）では新第三紀中新世新十津川層群を主とする
- (4) 西南地域（新十津川・浦臼地域）では先第三紀隈根尻層群を主とする

これらの地層地質の分布をより詳しく立体的に述べると次のとおりである。

①の北東地域については基盤が古第三紀石狩層群と推定され、その上部に新第三紀深川層（従来は滝川層群と呼称していたものであるが、より系統を細分化して改称したものである）である幌倉層・鮫淵層・稲田層・

江部乙層があり、その上に第四紀洪積層の高位・中位・低位段丘堆積層及びイルムケップ火山溶岩類及び現世沖積層である沖積段丘堆積層・氾濫原堆積層・現河床堆積層からなっている。

②の南東地域は古第三紀石狩層群で下階に当たる登川層・幌加別層・夕張層、中階に当たる茂尻層・若鍋層・美唄層、上階の赤平層・高根層・頼城層、最上階に当たる平岸層、芦別層が褶曲運動により互いに傾斜不整合の關係にあつて、数多くの断層が北西から南東方向に走っている。新第三紀鮮新世深川層群が石狩層群の上にあるその中に玄武岩質溶岩丘がみられるが、この地区の基盤と目される白亜紀系函渕層群・上部蝦夷層群もみられる。また第四紀洪積層については高位段丘堆積層を欠き、中位・低位段丘堆積層があり、沖積層については①と同様である。

③の西北地域は先第三紀隈根尻層群を基盤として上部に新第三紀中新世の西徳富層群惣富地層と新十津川層群六号沢層・徳富層・増毛層、さらに鮮新世の深川層群幌加尾白利加層、一の沢層、美葉牛層があり、玄武岩溶岩丘もみられる。第四紀系については①と同様の洪積層・沖積層であるが、扇状地堆積層がみられる。

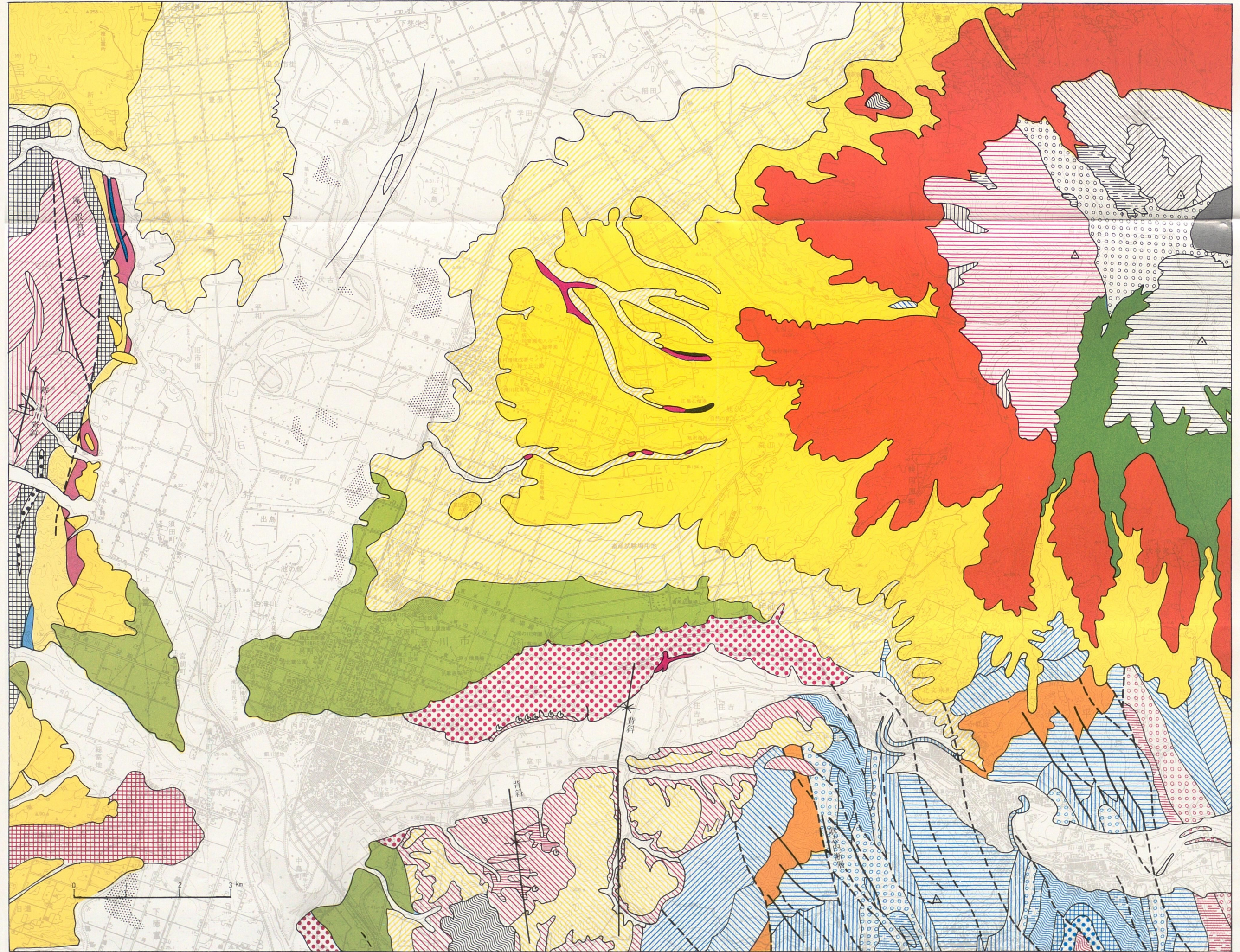
④の西南地域については先第三紀隈根尻層群浦臼山層・共有地沢層・隈根尻山層・惣富地川層が山地をなし、古第三紀樺戸層と新第三紀中新世層を欠いて鮮新世深川層群幌加尾白利加層・一の沢層・美葉牛層が隈根尻層群を覆っており第四紀系については①と同様である。

なおこれらの相互累重關係は次表のとおりである。

滝川市域を中心にその分布状態と地質は次のとおりである。

# 滝川市地質図

第四紀	現世	沖積層	現河床堆積層	砂及び礫	
		沖積層	氾濫原堆積層	泥炭質粘土	
			扇状地堆積層	礫及び砂	
			沖積段丘堆積層	砂・礫及び粘土	
		洪積層	低位段丘堆積層	砂・礫及び粘土	
	高位段丘堆積層		砂・礫・粘土・泥炭及び火山岩層		
	第三紀	新第三紀	深川層群	イルムケップ火山岩層	輝石安山岩・角閃石安山岩
				音江山溶岩	普通輝石紫蘇輝石橄欖石安山岩
				800m山溶岩	橄欖石普通輝石紫蘇輝石安山岩
				沖里河山上部溶岩	橄欖石普通輝石紫蘇輝石安山岩
沖里河山下部溶岩				角閃石含有橄欖石普通輝石紫蘇輝石安山岩	
イルムケップ山溶岩				普通輝石紫蘇輝石安山岩	
音江山集塊岩				普通輝石紫蘇輝石角閃石安山岩	
イルムケップ集塊岩				普通輝石紫蘇輝石角閃石安山岩	
805m山溶岩				普通輝石紫蘇輝石角閃石安山岩	
沖里河鉦泉沢溶岩				石英黒雲母角閃石安山岩	
中新世	新十津川層群	増毛層	玄武岩 溶岩丘	橄欖石玄武岩	
			滝川層	滝川層	砂岩・泥岩及び礫岩
				江部乙層	火山砕屑岩・礫岩及び砂岩
				稲田沢層	礫岩・砂岩及び泥岩(垂炭を伴う)
				鮫淵層	礫岩・浮石質砂岩及び凝灰岩
				幌倉層	塊状砂岩(凝灰岩を伴う)(○は化石)
				美葉牛層	礫岩・砂岩・泥岩及び垂炭 安山岩集塊岩
				一の沢層	浮石質砂岩及び浮石層(礫岩を伴う) 安山岩集塊岩
			幌加尾白利加層	塊状砂岩(シルト岩及び礫岩を伴う) 浮石質砂岩	
			最上階	増毛層 泥岩層	泥岩及び砂質泥岩(礫岩及び砂岩を伴う)
徳富層 塊状硬質泥岩層	硬質泥岩及び硬質泥岩・軟質泥岩互層				
幌内層	泥岩・泥灰岩				
古第三紀	石狩層群	上階	芦別層	砂岩・泥岩・炭層	
			平岸層	泥岩・砂岩	
			頼城層	泥岩・砂岩・炭層	
			高根層	砂岩・泥岩・炭層	
			赤平層	泥岩・砂岩	
		中階	美唄層	砂岩・泥岩・炭層	
			若鍋層	泥岩・泥灰岩	
			茂尻層	砂岩・泥岩・炭層	
			夕張層	砂岩・泥岩・炭層	
			下階	幌加別層	泥岩
白亜系	石狩層群	登川層	砂岩・泥岩・礫岩・炭層		
		函淵層群	砂岩・礫岩・泥岩		



この地図は、国土地理院発行の5万分の1の地形図を使用したものである。



地層表

第一章地誌

時代		地層名				備考							
		西部地域		東部地域									
新 生 代	第四紀	沖積層	現河床堆積物氾濫原堆積層				上昇運動						
			扇狀地堆積層										
			沖積段丘堆積層										
		洪積層	低位段丘堆積層		イルムケップ火山								
			中位段丘堆積層		溶岩山・火成活動								
			高位段丘堆積層										
			玄武岩				隆起、火成活動						
	第三紀	鮮新世	深深川階層	美葉牛層	砂岩・泥岩	深川層群	江部乙層	火山碎屑・凝灰岩	火成活動				
				一の沢層	凝灰岩・礫岩		稲田層	礫・砂・泥岩互層					
				幌加尾白利加層	火山碎屑物・浮石層		鮫淵層	凝灰質砂岩・泥岩					
中新世		稚新十津川階群	増毛層	砂岩層	石狩層群	幌倉層	塊状細粒砂岩	塊状砂岩	火成活動				
				泥岩層									
			徳富層	塊状硬質泥岩層			褶曲						
				板状硬質泥岩層									
			六号線層	砂岩泥岩互層									
				泥岩層									
西階徳富層		泥岩層											
		惣富地層	砂岩・礫岩層										
第三紀		古第三紀	樺戸層	夾炭層						石狩層群	芦別層	砂岩・泥岩・炭層	褶曲
	礫岩層			平岸層							泥岩・砂岩		
	先第三紀	隈根尻層群	惣富地川層	粘板岩 (砂岩)							頼城層	泥岩・砂岩・炭層	
				輝綠凝灰岩 (砂岩・粘板岩)							高根層	泥岩・砂岩・炭層	
			共有地沢層	粘板岩・砂岩 (輝綠凝灰岩)	赤平層	泥岩・砂岩							
				輝綠凝灰岩 砂岩 (粘板岩)	美唄層	砂岩・泥岩・炭層							
			浦白山層	輝綠凝灰岩 砂岩 (粘板岩)	若鍋層	泥岩・泥灰岩							
				登川層	砂・礫・泥岩・炭層								
	中生代	白亜系	?		?	函淵層群	砂岩・礫岩・泥岩	褶曲					
		先白亜系	?			上部蝦夷群	泥岩						
						黑色珪質片岩類		褶曲					
						神居古潭變成岩類							
					綠色片岩類								

## 1 白亜系

滝川市域内では見られないが、北へ向かって沈んでいる空知背斜の冠部に当たる下手岸の南方に露出している函渕層群及び上部菊石層（上部蝦夷層群）の一部に限られ、それ以外の露出はない。

白亜系は上位の石狩統によって不整合に覆われているが、広地域にわたる調査によって初めて不整合が認められるのであって、一露頭の観察では上下の地層が平行に重なっているようにみえる。

函渕層は主として細粒砂岩からなり、礫岩・泥岩・炭質頁岩・石炭の薄層をまじえる。砂岩の色は緑色を帯びていて上位の登川層と岩質が近似している。ただ本層には流紋岩質の凝灰岩をはさむことが多く登川層と区別できる。

上部蝦夷層群の地層は主として泥岩からなり砂岩の薄層をまじえる。この泥岩は泥灰岩質の団球を含み、団球に伴って軟体動物の化石が産出する。

## 2 古第三系

古第三系は石狩層群と幌内層とである。

石狩層群は主として淡水性の地層で、瀬海性の地層を挟有する。

幌内層は全く海性の堆積物で、石狩層群に対し見掛上不整合に重なっている。幌内層の基底は海緑石の多い砂岩若しくは礫岩をもつ

て石狩層群の最上部の芦別層に接し、野外の観察では平行不整合に見える。

### 石狩層群下階

**登川層** 登川層は北に沈もうとする茂尻背斜の冠部に露出して、ほぼ半楕円形の帯状をなして分布し、また神威の東方一キロメートルの位置に背斜軸に近く断層にはさまれて背斜の東翼にだけ露出したものである。いずれも白亜系の上に不整合に重なっており、岩質上は区別できないほど近似した様相を呈しているが幾分軟質である。

登川層は主として砂岩・砂質泥岩・泥岩の互層からなり、炭層を挟有する。砂岩は灰白色を呈するものが多く、黝青色を呈するものもある。中粒ないし細粒で塊状を呈するものが多いが、縞状の層理をもつものも介在する。泥岩は暗灰色ないし灰白色で層理に乏しく砂岩・泥岩ともに珪質の堅硬な地層をはさむことがある。

登川層は神威鉱の主要稼行炭層を挟有し層厚は四二〇メートルに達する。介在する炭層は二〇枚に達するが、稼行できるものは一〇枚前後である。

**幌加別層** 幌加別層は滝川の近くでは北方へ沈みかけた茂尻背斜の翼として下平岸の南方に馬蹄形に分布するものと、歌志内市神威付近に、神威背斜の冠部を占めて分布するものがある。

幌加別層は一名に神威泥岩層ともよばれ暗灰色ないし黝色の無層理な泥岩を主体として、これに細粒砂岩の薄層がわずかに含まれている。淡水棲の化石を包蔵し、植物化石破片は含まれるが炭層は

伴わない。厚さは一〇〇メートル前後で、層厚の変化は上下の夾炭層に比して少ない。

**夕張層** 夕張層は茂尻背斜及び神威背斜の両翼に露出するのみでなく、豊里背斜の冠部並びに芦別市盤ノ沢上流にも露出する。夕張層は細粒ないし中粒砂岩を主とし、泥質砂岩や泥岩をはさむ地層で炭層又は炭質頁岩を挟有する。砂岩は灰白色ないし灰青色で層理の乏しいものが多い。泥岩は暗灰色で常に砂岩と互層し、泥岩の厚さは最も厚いもので二メートルを越すことはない。

炭層は七枚あるが夾みが多いため稼行されているものは一〜二枚程度である。

#### 石狩層群中階

**茂尻層** 茂尻層が若鍋層から区分できるのは茂尻付近で、空知炭田の北部に当たる。青白色細粒砂岩と灰色泥岩との互層からなり、砂岩には塊状のものと板状層理を示すものがあり、塊状砂岩にはしばしば砂管を伴う。泥岩中にはまた泥灰岩の団球を含むものがあることが夕張層と異なった特徴である。茂尻層の上部に数枚の稼行炭層が介在しており、茂尻鉍附近が炭層数も六層あり遠ざかるほど少なくなっているようである。本層中には海棲動物化石が多い。

**若鍋層** 若鍋層は灰色又は暗灰色の泥岩を主とし、稀には細粒ないし中粒の砂岩層を局部的にはさむ。泥岩はおおむね塊状無層理で斧状の断口を示し、海棲化石を包蔵する。泥灰岩質団球を伴う地層は中部に多く上・中・下の三層に細分している。

**美唄層** 美唄層は奔別断層（岩見沢地区）以北に限られて分

布し、歌志内近辺で二〇〇メートル以上に達する。南より北側に厚く四〜五枚の稼行炭層を挟有し経済的に良好な地層である。

砂岩と泥岩の互層で中部ないし上部は砂岩に富み下部は泥岩を主に頁岩をまじえ、炭層を挟有している。砂岩は淡青色又は灰色で風化すれば褐色又は黄褐色となり、中粒砂岩が大部分を占める。泥岩は灰色又は暗灰色で、風化すれば細かく砕けやすい。また波状の層理を示し、断口は美しい縞模様を呈し炭層に近い所に多い。

#### 石狩層群上階

**赤平層** 多くの断層によって切られているため、正確な層序がつかみにくい。むしろ空知背斜の東翼に当たる炭山川附近の方が地層もよく発達して厚さもあり、地質構造がよく観察される。

下部から①下部泥岩部層（無化石・無炭層）②蛭介、カキ砂岩層③上部泥岩層（ボール帯）④上部夾炭部層（蛭介化石を含有する）。

上部泥岩層は海進が最も進んだ環境における堆積層であり、上部夾炭層は蛭介を包蔵する砂岩が炭層間に介在しているがこれは海退が始ってからの堆積物である。

**高根層** 高根層は層理の発達した砂岩を主とし、わずかに数枚の炭層をはさむ。この模式地は芦別市西方四キロメートルの高根川上流で、層厚は高根沢で二〇〇メートル、炭山川では五〇〇メートルを示し南北に帯状に分布しているが、高根層の厚さは北方へ向かうほど薄くなっている。

**頼城層** 高根層の上位に厚さ約一五〇メートルの泥岩を経て夾炭層が重畳する。この下部の泥岩中には泥灰岩及び瀕海性の化

石を伴い上下の夾炭層を隔てている。上部の夾炭層は厚さ約三〇〇メートルに達し高根川流域において厚い炭層を挾有する。炭層は上位一番層から二二番層と名づけられ一三番まで頼城層上部に相当する。

空知川北岸になると頼城層と高根層の区別がむずかしい岩相となる。

#### 石狩層郡高上階

**平岸層** 平岸層は砂岩のやや多い砂岩泥岩互層からなり、層理は明瞭であることが多いが、風化するとあられ状の細片に砕け易いので層面を測定しにくい、五メートル以下の薄層が重なっている。

砂岩は灰色がかつた細粒でしばしば蜆介化石が散在する。泥岩には暗灰色のものが多く、時には黒色を示すものがある。層厚は小百戸沢で二〇〇メートル前後であるが、歌志内断層以西では四〇〇メートルでしばしば石炭の薄層をはさみ、砂川附近に近づくほどその傾向は著しい。

露出地は下芦別北方の空知川北岸、下平岸北方の赤間沢中流、歌志内断層以西のナエ沢流域である。

**芦別層** 芦別層は砂岩泥岩の互層からなり炭層をはさむ。

砂岩は灰白色又は淡緑色を呈し、中粒ないし粗粒で厚層をなし、塊状を呈し堅硬である。泥岩は暗灰色又は黒色を呈し葉状の層理を示す。また灰鉄質の細粒からなり風化すると特徴ある淡褐色を呈する。岩石を帯状にはさむことが多い。芦別層の厚さは三七〇メートル前

後で上限から下限まで炭層がまんべんなく介在するが、稼行できる炭層は地域によって異なる。

### 3 新第三系鮮新世

深川層群のうち滝川地域に限定した地層の説明にとどめるが、本層は石狩層群の上部を覆い、地表に露出しているものである。

**幌倉層** 深川層群の低位地層に当たり、石狩層群とは傾斜不整合関係にあつて、滝川市域では空知川右岸の東一丁目から三丁目にかけて露出しており空知川をはさみ広く赤平・砂川・歌志内市の丘陵地一帯に分布している。

本層は青灰色無層理の細粒砂岩を主とし、細・中礫・浮石・天然木炭、亜炭片、炭粒などが含まれている。風化すると灰色又は帯黄褐色を呈し、時には微粒となる。礫はほとんど古期岩類で、時に密集して礫岩の薄層を形成するが連続性に乏しい。浮石は淡灰色か淡黄色で稀に暗黒色もあり多孔質で丸味がある。

幌倉層は二〇〇〜三〇〇メートルの層厚で砂岩中あるいは団塊中に化石が含まれ、化石帯を形成する場合は礫岩を伴っており、化石には貝類と植物が主である。これらの岩質、含有化石から石狩川西方山地の幌加尾白利加層とほぼ確実に対比されるものである。

**鮫淵層** 鮫淵層が模式的に発達するのは赤平市のナエ沢兩岸である。本層は礫岩・凝灰岩・凝灰質砂岩・同質泥岩などから成る。礫岩は本層下部と上部に多く、中部は主として浮石質凝灰岩・

凝灰岩などからなるが必ずしも一定していない。礫岩層の基底には時に亜炭の薄層や岩質泥炭が認められる。

空知川北岸の東滝川附近のものは鉄分で硬く固結され板状を呈している。一般に本層の礫岩は特に風化する、段丘堆積層の礫層と区別しにくいことがある。凝灰岩は一般に浮石質で黄白色か淡褐色を呈し凝灰質砂岩、同質泥岩に移化し、浮石は白色で石英とわずかの黒雲母を含む。砂岩・泥岩は下位の幌倉層に比べ著しく凝灰質で帯黄灰色、帯青灰色である。泥岩には稀に亜炭薄層を介在する。

本層の層厚は一〇〇メートル内外で石狩川西部の一の沢層に対比されるものである。

**稲田沢層** 稲田沢層は稲田沢上流、須麻馬内川中流、江部乙川下、上流、熊穴沢などに点在露出するだけである。本層は礫岩、砂岩、泥岩の互層で亜炭層を数枚挟有する。礫岩は中礫を主とし、多くは古期岩類の円礫から成るが、安山岩礫も含むことがあり、また浮石も含有する。砂岩は少なく凝灰質で時に縞状で、礫質砂岩中に炭粒を含むことがある。泥岩は淡灰色無層理で亜炭層を介在し、その附近のものはチョコレート色となっている。亜炭層は熊穴川下流で三〇センチメートルでこれが厚い方である。層厚は最大二〇〇メートルと推定されている。

本層は西部地域の美葉牛層に対比される。

**江部乙層** 江部乙層は稲田沢下流須麻馬内川、江部乙川の上流、支流などに分布し、火山碎屑物に富んだ地層で、浮石質凝灰岩・凝灰岩を主とし、細礫岩、砂岩を従とする互層をなしている。

礫は主として古期岩類よりなるが極めて稀に安山岩礫も含む。本層は層厚七〇メートル以上であるが化石は含まれていない。西部地区での対比地層がなく東部地域にのみ分布している。

#### 4 滝川層

滝川階滝川層は広い地域を覆うもので、従来から深川層群もこの範囲に入るものであったが、地層の研究細分化により改正して深川層と呼称されるようになった。前段までに各層を述べたがその層を覆い、さらに開発庁刊図幅「滝川」では第四紀高位段丘堆積層とある部分を含めて滝川層とした。

滝川層はイルムケップ火山噴出物によって覆われているため、実際に露出しているのはイルムケップ火山の山麓に当たる部分になるが、露出が最もよく連続して見られるのは江部乙地区加賀団体の沢である。この沢では滝川層の全層が西傾斜をしているため、岩質的特徴が上限から下限まで観察できる。

本層の上部は砂岩、頁岩と礫岩の互層である。砂岩には中粒・未凝結で浮石の粒を多く含むもの、含まないものなど様々である。

また頁岩はしばしば砂岩との細かい互層となっていることが多く頁岩のみで厚層をなす場合は礫岩と層位的に近接していることが多くい。礫岩は一般に巨礫からなることは少なく、一般に直径一センチメートル程度以下である。礫岩はほとんどがレンズ状であるため、礫岩層による層位区分は限られた小範囲にしか当てはまらない。

下部地層は凝灰質の泥岩を主体とし、これに砂岩層を挟有する。

この地層の上限は木質亜炭の薄層(二〇〜三〇センチ以下)をもって境としているが、凝灰質は風化すると青色ないし赤色がかつた色調を帯びることが特徴である。その基底部に近く海棲介化石を多産する。

本地層の厚さは三〇〇メートル程度であるが、下部の地層はその厚さの変化が著しく、西方に厚いが東へ向かってしだいに減じ、芦別市新成付近では数メートルにすぎない。

## 5 第四系

イルムケップ火山噴出岩及びその岩層

イルムケップ火山は滝川層堆積の末期に滝川低地帯に噴出した火山錐であつて、その基底直径は一三キロメートルに達している。基盤岩である古第三紀の石狩層群、新第三紀の川端層(音別市新成・油谷の東方露出)群及び滝川層を被覆している。

本火山は溶岩流、集塊岩及びそれらの碎屑岩から構成され、噴出順序、岩質により次の一〇種に分類される。上位から列記すると次のとおりである。

- 一 イルムケップ火山碎屑物
- 二 音江山溶岩
- 三 八〇〇メートル山溶岩
- 四 沖里河山上部溶岩
- 五 沖里河山下部溶岩
- 六 イルムケップ山溶岩
- 七 音江山集塊岩
- 八 イルムケップ集塊岩
- 九 八〇五メートル溶岩
- 十 沖里河鉍泉沢溶岩

これらを噴出順の分布状態について述べる。

### 沖里河鉍泉沢溶岩

本溶岩はイルムケップ火山活動の最初に流出したものと考えられる。分布は本火山の北部を占めるが、その後の噴出物により露出部分は少ない。沖里河鉍泉の沢と広里の沢、西沖里河沢に小露出があり、岩石は石英黒雲母角閃石安山岩である。

鉍泉ノ沢ではかつて金属鉍山としての探鉍がなされた。西沖里河沢では黒雲母を含まない角閃石安山に移行しており、本溶岩中の数カ所から炭酸分の強い鉍泉が湧出している。

### 八〇五メートル山溶岩

本溶岩は火山の中心地にありイルムケップ山・音江山・沖里河山、八〇〇メートル山の間分布しているが、イルムケップ山の東側に当たる吉田沢、三又山沢などにも露出している。

岩石は青灰色又は淡褐色で緻密な石基中に短柱状の斜長石、角閃石などが斑晶として認められる。局部的に硫化作用を受け、黄鉄鉍などの鉍染が見られる。

### イルムケップ集塊岩

本集塊岩はイルムケップ火山中最も多量な溶岩で、火山体の東・南・西部に広く発達し、北部には見られない。大部分は山麓部に限られて露出しているが、直接新第三紀層(滝川層)を覆い、本火山錐の基底部を構成している。

岩質は均一でないが角閃石安山岩質岩石の角礫を凝灰質が充填したものである。

### 音江山集塊岩

本集塊岩は鉍泉沢溶岩、八〇五メートル山溶岩、イルムケップ集塊岩を覆っている状態で、その後の音江山溶岩に被

覆されたもので、露出箇所は少ない。しかし音江山西斜面の基底部は本集塊岩により構成されているものと考えられる。

岩石は黒色緻密質の輝石安山岩礫が主である。

イルムケップ山溶岩 八〇メートル山溶岩、イルムケップ集塊

岩を覆っている。また芦別市の三又山を形成している。

岩石は黒灰色を呈し、緻密な石基中に白石の斜長石の小斑晶が多数散在しており、有色鉱物の斑晶としては輝石が不明瞭ながら認められる。

沖里河山下部溶岩 沖里河山の北麓部に扇状に分布し、鉾泉沢、

八〇五メートル山溶岩を覆っている。岩石は灰白色粗粒の輝石安山岩であるが、通常角閃石の斑晶を含み、稀に大きな結晶が認められる。形状としては懸崖をつくり板状節理を呈している。

沖里河山上部溶岩 本溶岩は沖里河山三角点附近から北方へ流

出した溶岩で、下部溶岩を被覆している。山頂では板状節理を呈し、懸崖をなしているが、岩石は黒灰色、粗粒の輝石安山岩で下部溶岩と岩質は酷似している。下部溶岩に比較すると角閃石、橄欖石の量が非常に少ない。

八〇メートル山溶岩 本溶岩は八〇メートル山附近から東方

一帯に分布しており灰黒色、粗粒の安山岩である。斑晶としては斜長石、橄欖石、紫蘇輝石、普通輝石、稀に角閃石が認められる。橄欖石の斑晶の著しく多いことが特徴であり、磁鉄鉱の微粒も多量に散在している。

音江山溶岩 音江山三角点附近から西斜面を扇状に流れた溶岩

流で、東部では八〇五メートル山溶岩を、南東部ではイルムケップ集塊岩を、西部では音江山集塊岩を被覆している。滝川地域の最高標高地帯はこの溶岩である。溶岩の露出状況はきわめて悪く、三角点東側で観察できる程度である。

岩石は肉眼的に黒灰色緻密の溶岩で、多量の橄欖石が斑晶として観察される。石基には磁鉄鉱が非常に多く散在し、普通輝石の小粒は斑晶の間隙を填めている。

イルムケップ火山碎屑物 火山帯の全周辺にわたって厚く堆積

し、ほとんど頂上附近まで覆われている。そのため下位に分布する本火山の各溶岩は侵蝕により放射状に発達した沢の中流以上と、火山中心部の深く侵蝕を受けた部分にのみその露出が認められるに過ぎない。山麓部における岩層は東部の内大部・新城及び西部の中幌倉、江部乙一帯に厚く堆積し、場所によっては厚さが数一〇メートルに達することがある。本岩層は粘土と火山噴出物との混合物であるが、岩礫のみの厚い堆積層の場合もある。岩礫は二次的堆積のため場所により輝石安山岩礫の場所や輝石安山岩、角閃石安山岩の混合礫の場合とがある。岩礫は半角礫状のものが多く大きさも一定でなく、大きなもので一メートルぐらいのものもある。

イルムケップ火山活動の岩石成分変化

第三紀末の滝川層堆積末期から活動を開始し、第四紀段丘堆積層の堆積前にその活動を閉止したと考えられるイルムケップ火山は活動の初期と末期で溶岩構成鉱物に著しい差異がある。

初期には石英安山岩・閃雲安山岩であり、中期は角閃安山岩が主

となり、音江山集塊岩に入ると輝石安山岩、次いで溶岩が噴出して、音がしだいに塩基性（アルカリ性）となり、最後には有色鉱物溶岩として橄欖石を最も含有する輝石橄欖石安山岩となっている。要するに本火山は酸性の安山岩に始まり、塩基性の安山岩に終わっている。

したがって滝川市域の山岳地帯は塩基性火山溶岩、礫地帯である。

#### 第四系洪積層

洪積層は大別して三つの地形面を形成する段丘堆積層からなる。その高さとおよその対比は次のとおりである。

- (1) 高位段丘 海拔八〇〇〜一二〇メートル
- (2) 中位段丘 海拔五〇〇〜七〇メートル
- (3) 低位段丘 海拔四〇〇〜六〇メートル

構成物質はいずれも下部は礫層を主とし、上部へ次第に砂層、粘土層と細粒のものに移化するのが一般的である。この三段の段丘は石狩川及び空知川によって形成されたものと考えられる。

**高位段丘堆積層** 本市においては滝川層に類似しているところから識別が困難であり、滝川層とした。

**中位段丘堆積層** 高位段丘が河川によって、そのほとんどが基底まで刻まれているのに比べ、中位段丘を流れる川は、段丘基底まで削りつくしていないことが多く、高位段丘との境界は明瞭な段をなしている。東六丁目附近の本層中には厚さ二〇センチメートルの泥炭層が広く分布し、また本層中には流木が見られるが泥炭層より下にあり、東十丁目付近では長さ数メートルに及ぶものがある。

**低位段丘堆積層** 石狩川及び空知川をはさんで地域の中央部か

ら南部にかけて発達する。空知川北方では中位段丘との区別は明瞭である。氾濫原及び沖積段丘には峻しい崖をもって望んでいる。

**第四系沖積層** 沖積層は新しい地層で本市域では沖積段丘堆積層、氾濫原堆積層及び現河床堆積物からなっている。

**沖積段丘堆積層** 空知川北岸に発達するのが主要なもので、その他に空知川と石狩川の合流点の南方に小分布する。空知川北岸のものは氾濫原との境界がやや不明瞭である。

**氾濫原堆積層** 石狩川、空知川及びその他の河川流域に発達する。石狩川の氾濫原は三日月湖や湿地を伴い、またしばしば泥炭地も見うけられ、主として泥炭質の粘土から構成されており、海拔三〇メートル前後の高さを有している。

**現河床堆積物** 石狩川及び空知川の河床は氾濫原をさらに五メートル前後刻んでいる。堆積物は余り多くないが砂と礫からなる。

なお現河床について河川の変化が著しく、特に石狩川流域は砂礫採掘に適したことにより相当量の採掘がなされた。

△「開発庁地質図幅説明書「滝川」」「歌志内」」「深川」▽

#### 第四節 応用地質（地下資源）

滝川市域内では見るべき地下資源の活用はない。しかし、活用できる地下資源がないのであろうかと改めて考えるとき、前項で述べたとおり滝川市の地質基盤は白亜系であり古第三紀石狩層群であるというところから、将来思わぬ活用時代の到来もあり得る。

1 鈹 泉（江部乙温泉）

イルムケップ火山により深川市沖里河では明治三十年札幌の医師俣野大治郎が鳩の水浴から鈹泉を発見し、三十八年から温泉旅館ができてゐる。この沖里河は炭酸鈹泉であるが江部乙地区では大正十五年十月、島津勇治郎ほか二、三名が作況調査中に魚つりをしていた人から鈹泉の話聞き、西三十三丁目十二丁目間の西方沼付近で湧出場所を発見した。昭和二年一月、道から鈹泉の判定を受けたが島津勇治郎がこの湧水を利用して現地に江部乙鈹泉場を開設、昭和三年九月水源から一インチ半の鉄管樋で引き江部乙駅前に移設吉田某ほか一、二名が加わった共同経営として昭和十五年まで続けた。昭和十六年四月大林文平これを譲り受け、現在地で「大林旅館」兼「江部乙鈹泉」を開設、昭和十八年、水質試験を受け多くの医治効能判定があつて湯治客で賑わつた。

終戦後、浴場法改正により保健所の担当となり昭和二十八年改めて水質分析試験を受けた。

衛試第一一九号 試験成績書

依託者 空知郡江部乙町一五一八番地 大林 文平

品名 鈹泉（原泉所在地 江部乙町西十三丁目一七三八番地）

試験目的 定量分析並びに医治効能及び禁忌症

成績

右鈹泉は摂氏水點下十三度（昭和二十七年十二月十日）の気温に於ける水温は摂氏二十度で味無く淡黄褐色を帯び硫化水素臭を有し検水一疋中の蒸発残留物は〇・一六四瓦であつて摂氏十五度に於ける比重は一、〇〇〇、水素イオン濃度は五・八を示しベンチジン反応フェノールフタリン反応は共に陰性である。

これについて温泉中分析法に従つて定量分析を行った結果一キログラム中に含有する成分並びにその分量は次の通りである。

一 カチオン	ミリグラム	ミリバール	ミリバール%
ナトリウムイオン	八・六五〇	〇・三七六	八・七七
アンモニウムイオン	〇・四三一	〇・〇二四	〇・五五七
カルシウムイオン	二一・一六	一・〇五六	二四・六一
マグネシウムイオン	三四・八四	二・八二四	六五・八二
第二鉄イオン	〇・一九六	〇・〇一一	〇・二四五
計	六五・二七七		
一 アンオン			
ヒドロ炭酸イオン	二五九・九	四・二六一	九九・三〇
硫酸イオン	〇・九九二	〇・〇三	〇・六九九
計	二六〇・八九二	四・二九一	一〇〇・〇〇〇
一 非電解質	ミリグラム	ミリモル	
メタ硅酸	一七・六八	〇・二二六	
合計	三三三・八五		
一 ガス物質			
無水炭酸	二・六六六	〇・〇六一	
硫化水素	一・二〇六	〇・〇三五	
総計	三四七・七二一		

其他クロールイオン、硫酸イオン痕跡

右の成績に依り本鈹泉は單純硫化水素泉に属するものと認められる。

右試験成績に依り本成績書を交付す

昭和二十八年三月十八日 北海道

第一一九号の二号 判定書

住所 空知郡江部乙町一五一八番地 大林 文平

鈹泉（原泉所在地 空知郡江部乙町西十三丁目一七三八番地）

禁忌症 総ての急性疾患、肺結核、悪性腫瘍、高度の心臓病

適応症 （浴用）胃酸減少症、脂漏、尋麻疹、硬結性紅斑、湿疹ロイマチス、

痔疾、動脈疾患、心筋衰弱、炎症性婦人科疾患

(飲用) 湿疹、糖尿病、動物性皮膚病

昭和二十八年三月十八日衛試第一一九号試験成績書により本判定書を交付する

昭和二十八年三月十八日

北海道

昭和四十年八月、子息大林政義が引き継ぎ「大林旅館」兼「江部乙温泉」として開業している。

## 2 地下温水

地下温水は地形と地質に左右されるが滝川地域は大きな有望地と推測されている。滝川層に一面覆われた滝川市の地形は東方を見れば芦別市新域まで続きその東側は神居古潭変成岩類の壁がある。南側は新第三紀石狩層群の山々が空知川まで迫っており、西側を見れば暑寒別連峰、隈根尻層群が西南に張出している。北側は石狩川が注ぎ込んでいるが、深川を越えて北側は川端層群が東側から北側に張り出している。

このような地質構造から地下水の貯溜が考えられる。地下温度については一〇〇メートルごとに三度の上昇があり、滝川層と沖積層がどの程度の層厚であるかが問題である。

## 3 石炭

最も有望な地下資源は石炭である。日本でも有数の炭鉱地帯である石狩炭田は古第三紀石狩層群の地層であり、その北限が赤平、芦

別の産炭地となっているが、滝川市の地下基盤はこの地層からなる。地域の南である空知川を境として地下に傾斜し、東側は東滝川の約四キロメートルに露頭のある石狩層群の地層は地域の東南地帯で意外に浅い所に石狩層群夾岩層があると推測できる。このことから将来の稼行地としては東滝川地区である。

## 4 石油・天然ガス

本道には上部古生代から第四紀に至る各時代の地層が分布している。このうち石油及び構造性天然ガスに関係のあるものは、白亜紀層、古第三紀層、新第三紀層で、水溶性天然ガス鉱床は新第三紀の上部と第四紀層にも含まれる。現在採油、採ガスは新第三紀層の一部にすぎない。白亜紀層の含油率は非常に高く、中近東の油田はほとんどが白亜紀層のものである。白亜紀層は道内に広く発達しており、中軸地帯のみでも南北三七五キロメートル、東西四二キロメートルを占め、その厚さも一万二、〇〇〇メートルに達していることから有望視されているが積極的な探査がなされていない。滝川市の近くでは昭和三十一年一月から三月にかけて樺戸郡新十津川町大和地区の丘陵地である新十津川背斜を掘さくしたことがある。新第三紀中新世新十津川層群の地層を二〇〇メートル海拔地点から九二四・二九メートル掘さくされたが、浅部にガス徴をみたものの深度六一六・七メートルで基盤である樺戸古生層に達し不成功に終わっている。

## 第二章 気象

### 滝川の生活こよみ

北国の四季は明らかに区分され、その中で順応した生活を、また工夫をして環境を切り開いていく。滝川では四季のうち冬が長い。

一月 粉雪が舞い除雪車が早朝暗いうちから動きだし、各家庭では出入口の除排雪が日課に加わる。また一面銀世界を待った人々は、スキー、スケートを楽しむ季節でもある。

中旬から下旬にかけて寒気がきびしく、水道の凍結を防ぐため気をつかい、北国の冬を知らされる。

二月 吹雪が続いたり寒気がきびしい。時には暖気が訪れたりで天候は不順である。降雪量は年間最高となる月であり、住宅の周囲は雪の山となる。下旬には寒気がゆるんでくる。

三月 雪どけが始まり、また降り積ることを繰返し、ときどき吹雪もあるが次第に雪の山が低くなる。中旬になると日ざしが明るくなり、住宅前や商店街の歩道では「雪割り」風景がみられる。

日当たりのよい道端の雪の下に「ふきのとう」が芽を出し始

め、下旬になるとまだらに顔を出した土の香りとふきのとうや福寿草が春を告げる。

四月 雪は消えても中旬ごろまではときどき雪の訪問を受ける。野原の草の芽が始め、冬から開放された人々は、やわらかな日ざしを楽しむ。

下旬には遠く郭公の鳴き声が聞える。そのころになると春耕を待った人々が動き出す。

五月 梅も桜も蝦夷地の草花はいっせいに咲き始める。晚い霜も中旬まででそのころから田植えの光景も見られる。毎日のように南からの季節風が吹き日一日と暖かくなる。下旬の日曜日には小学校の運動会が催され、球戯スポーツの季節に入る。

六月 野山の草木の緑も増し、梨に続いてリンゴの花が満開となり初夏の風が香る。郊外山岳地ではワラビや根曲り竹のタケノコ採りでにぎわう。イチゴが出廻りサクランボが色づきはじめる。

七月 気温が急に上がり、アイスクリームを手に入れた人々は海に山に涼を求める。地物の野菜の「なす」、「きゅうり」「トマト」などが回り下旬にはメロンも出荷される。また下旬は北国の人々に耐えられないほどの猛暑となる。

八月 猛暑が続くと思っているうちに気温は下り坂となる。中旬に入ると急に秋めき朝夕は肌寒さが感じられる。北国の味覚トウキビが出初める。下旬は大雨となる年が多く最多降水月である。

九月 季節風は北風に変わり、野山は色づきはじめる。秋の味覚が食卓をにぎわし、しのぎやすい月であるが、時として台風・大雨がある。

十月 小春日和が続くが、上旬に初霜がくる。落葉キノコ採りが終わるころ稲の刈取りとなる。菊が香り雪虫が飛びかうと木枯らしが吹きはじめ冬の準備に追われる。下旬ではストーブのほこりを払い、ストーブが生活に重要な位置を占めるようになる。

十一月 暑寒別連峰は既に雪に覆われ、近くの山の頂が白くなると寒さが急に迫まる。上旬から雪がちらつき消えてはまた降るのを繰り返すうちに下旬には根雪となる。長い冬ごもりに備えて漬物や野菜の貯蔵などに忙しい。

十二月 雪の日が多くなり積雪が増して寒さが加わる。下旬から野山はスキーを待ちわびた人々でにぎわう。また新年を迎えるため生活のリズムも忙しくなり、買物客がまちにあふれ、メ飾の市もたつて年が暮れる。

### 第一節 気象観測

滝川での気象観測は明治時代から戸長役場・村・町役場に軽便な装置を置いて測候されていたもので、この観測値をもって観測所又は道庁に報告されていた。

北海道第三部発行「北海道気候一班」の明治三十九年凡例には次のように記されている。

観測所ノ数ハ測候所ノ外支庁四ヶ所町村役場四十ヶ所戸長役場二十一ヶ所及航路標識管理所ノ承諾を得テ本庁ニ報告スル燈台九ヶ所合計七十四ヶ所ナリ、而シテ本表ニハ報告ノ内正確ト認メタル分ノミ掲載セリ。

このように本市においては役場において観測したものであったが、昭和三十四年六月十二日に札幌管区気象台滝川気象通報所が開所されたので正式に観測値が記録されるようになった。なお、昭和二十五年十一月に道立農業試験場原々種農場が設置され、気象観測を行っている。

### 1 気 温

一年・月別平均気温表

年	月												年間			
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	一〇月	十一月	十二月				
明治	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
大正	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四
	(+) 六・九	(+) 一〇・六	(+) 二・七	七・〇	九・〇	一七・二	一八・〇	二六・一	一九・六	一四・五	一一・三	(+) 一・四	(+) 一・四	五・七	八・一	七・九
	(-) 五・七	(-) 六・九	〇・三	五・六	一二・五	一七・〇	二四・三	二三・六	一七・一	一一・九	一・四	(-) 一・四	(-) 一・四	一・四	七・九	七・九
	(-) 六・一	(-) 二・一	〇・〇	五・七	一六・八	二〇・八	二二・四	二三・二	二一・一	一二・七	六・四	(-) 一・二	(-) 一・二	一・二	一〇・一	一〇・一
	(-) 八・一	(-) 八・一	〇・〇	七・一	一二・一	一九・八	二二・四	二三・二	二一・一	一二・七	六・四	(-) 一・二	(-) 一・二	一・二	一〇・一	一〇・一

(右の表は「北海道気候一班」によるもので、午前十時の平均値を記録したものである。)

なお、明治・大正時代及び昭和の初期まで一般では気温を華氏にて称えており、零下の場合にのみ摂氏を称えることを例としていた。

(昭和二十八年以降は午前九時の観測記録である。昭和五十三年は毎正時二四回(一日)の平均の月平均である。)

二 年別最高・最低気温(摂氏)

年	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	一〇月	十一月	十二月	年間	備考
昭和二四	(-) 四・二	(-) 四・〇	(-) 二・五	四・五	一四・七	一九・六	二五・〇	二七・六	二二・〇	一三・三	二・三	三・五	九・六	町勢要覧による
二八	(-) 一〇・八	(-) 一〇・二	二・一	四・三	一〇・一	一五・八	二〇・一	一九・九	一五・九	九・五	二・一	四・二	五・五	原々種農場による
三二	(-) 七・八	(-) 八・四	五・一	四・七	一一・八	一四・三	二〇・四	二〇・九	一五・三	〇・三	二・四	二・七	六・五	同
三六	(-) 九・一	(-) 六・八	二・四	六・五	一二・五	一七・三	二一・一	一九・六	一八・三	九・九	二・四	三・九	七・二	通報所による
三七	(-) 六・七	(-) 七・二	三・〇	七・一	一二・五	一五・七	二〇・〇	一九・〇	一六・五	七・九	二・七	三・七	六・七	同
三八	(-) 八・〇	(-) 五・四	一・〇	五・三	一一・五	一六・二	二〇・八	二一・九	一五・二	九・九	二・七	二・五	七・三	同
三九	(-) 七・九	(-) 七・二	一・三	五・五	一一・四	一六・三	二〇・八	二〇・六	一四・三	八・三	二・四	二・五	六・二	同
四〇	(-) 六・二	(-) 六・八	一・三	三・八	一一・〇	一六・四	二〇・八	二一・五	一四・九	九・七	二・八	四・二	六・五	同
四一	(-) 七・六	(-) 七・五	一・一	三・八	一一・四	一五・七	二〇・七	二一・八	一四・九	八・六	二・八	四・一	六・六	同
四二	(-) 九・三	(-) 七・七	一・八	五・八	一一・八	一六・〇	二〇・一	二一・三	一五・三	八・七	二・三	四・六	七・二	同
四三	(-) 八・九	(-) 八・五	一・〇	六・二	一一・五	一五・〇	二〇・四	二〇・二	一五・二	八・〇	二・〇	五・一	七・六	同
四四	(-) 〇・五	(-) 六・一	五・六	四・一	一〇・四	一五・五	二〇・七	二一・五	一五・四	〇・四	二・〇	四・八	五・七	同
四五	(-) 〇・五	(-) 六・一	五・六	三・七	一〇・五	一五・五	二〇・三	二一・五	一五・四	〇・四	二・〇	四・八	五・七	同
四六	(-) 九・〇	(-) 六・八	一・二	五・二	一一・三	一五・九	二〇・五	二一・八	一五・二	〇・七	二・三	四・三	六・六	同
四七	(-) 七・〇	(-) 六・九	一・二	七・一	一一・七	一五・五	二〇・三	二一・八	一五・二	〇・七	二・三	四・三	六・六	同
四八	(-) 六・二	(-) 五・八	一・九	七・七	一一・一	一五・八	二〇・二	二一・五	一五・二	〇・七	二・三	四・三	六・六	同
四九	(-) 八・〇	(-) 五・八	一・九	四・七	一一・一	一五・八	二〇・二	二一・五	一五・二	〇・七	二・三	四・三	六・六	同
五〇	(-) 七・二	(-) 七・〇	一・七	四・四	一一・一	一五・八	二〇・二	二一・五	一五・二	〇・七	二・三	四・三	六・六	同
五一	(-) 七・三	(-) 六・九	一・二	六・〇	一一・一	一五・九	二〇・二	二一・五	一五・二	〇・七	二・三	四・三	六・六	同
五二	(-) 一・九	(-) 〇・三	二・八	三・五	一〇・〇	一四・二	一九・三	二〇・六	一四・一	七・七	一・五	三・八	五・七	同
五三	(-) 八・六	(-) 二・八	四・二	三・七	一〇・七	一四・四	一九・三	二〇・六	一四・一	七・七	一・五	三・八	五・七	同

第二章 気象

年別	最高極	最低極	年別	最高極	最低極
明治三三	三五・〇	一九・〇	昭和二〇	三四・二	二六・〇
三九	三八・〇	一八・〇	二六	三〇・〇	二四・〇
四一	三八・五	二九・〇	三二	三三・〇	二五・〇
四二	三三・五	三二・五	三五	三三・〇	二四・〇
大正			四三	三五・五	二〇・〇
四三	三三・五	三二・五	四九	三六・〇	二四・〇
四四	三三・五	三二・五	五五	三四・〇	二六・〇
四九	三三・五	三二・五	六一	三四・〇	二六・〇
五〇	三三・五	三二・五	六七	三四・〇	二六・〇
五二	三三・五	三二・五	七三	三四・〇	二六・〇
五三	三三・五	三二・五	七九	三四・〇	二六・〇



第二章 象

昭和二十八年	年
四八	一月
四七	二月
四六	三月
四五	四月
四四	五月
四三	六月
四二	七月
四一	八月
四〇	九月
三九	一〇月
三八	十一月
三七	十二月
三六	年間
三五	
三四	
三三	
三二	
三一	
三〇	
二九	

(二) 年月別最低気温

年月別最低気温
五三
五二
五一
五〇
四九
四八
四七
四六
四五
四四
(一)
一七
一六
一五
一四
一三
一二
一一
一〇
九
八
七
六
五
四
三
二
一
〇
(一)
二
三
四
五
六
七
八
九
一〇
一一
一二
一三
一四
一五
一六
一七
一八
一九
二〇
二一
二二
二三
二四
二五
二六
二七
二八
二九
三〇
三一
三二
三三
三四
三五
三六
三七
三八
三九
四〇
四一
四二
四三
四四
四五
四六
四七
四八
四九
五〇
五一
五二
五三
五四
五五
五六
五七
五八
五九
六〇
六一
六二
六三
六四
六五
六六
六七
六八
六九
七〇
七一
七二
七三
七四
七五
七六
七七
七八
七九
八〇
八一
八二
八三
八四
八五
八六
八七
八八
八九
九〇
九一
九二
九三
九四
九五
九六
九七
九八
九九
一〇〇

2 雨 量

一 年 降 水 量

年降水量は次表に示すとおりであるが、一、〇〇〇ミリメートル

年 別	降 水 量	年 別	降 水 量	年 別	降 水 量	年 別	降 水 量
明治三九	九六四・三	昭和三二	一、六四四・一	昭和三九	一、三七一・五	昭和四六	一、一二三・三
四一	九二七・五	三三	一、一四四・九	四〇	一、五〇一・五	四七	一、三〇九・三
四四	一、〇二一・三	三四	一、〇二一・八	四一	一、四三八・七	四八	一、五二一・六
昭和二八	一、〇六九・一	三五	一、二三二・九	四二	一、二〇六・七	四九	一、四〇九・一
二九	一、二一六・五	三六	一、五〇五・九	四三	一、〇六三・〇	五〇	一、三九九・五
三〇	一、三八〇・七	三七	一、四九八・一	四四	一、五八八・〇	五一	一、一四五・五
三一	一、三〇〇・八	三八	一、二九七・八	四五	一、三二五・〇	五二	一、〇八二・五

二 最近八年間の月別最多・最少・平均降水量 (昭和四四年〜五一年)

区 別	月	一 月	二 月	三 月	四 月	五 月	六 月	七 月	八 月	九 月	一〇月	一 一 月	一 二 月	八 年 間 中 の 最 多 最 少 の 年 月
最 多		一六七・五一〇二・一	八二・六一一四・二	一三三・六一六二・二	一六七・八三〇八・五	二四七・〇二二八・六	一九三・八一九九・一	四八八年八月						三〇八・五
最 少		六四・四	四四・一	三四・〇	三五・一	四七・〇	一一・九	二六・三	五九・〇	九三・〇	一四四・〇	一〇一・三	八四・五	四八年六月
平 均		九八・四	六六・七	五七・三	六八・二	八九・二	八九・一	八三・一	一一七・〇	一七四・一	一七三・七	一四七・一	一四一・五	一一・九

なお昭和四十四年以降の日降水量最多は昭和五十年八月二十三日

の一二六・五ミリメートルである。

四九	(-)二二・四	(-)二二・二	(-)二二・八	(-)二二・八	(-)二二・八	(-)二二・八	(-)二二・八	(-)二二・八	(-)二二・八	(-)二二・八	(-)二二・八	(-)二二・八	(-)二二・八	(-)二二・八
五〇	(-)二四・八	(-)二五・二	(-)二〇・七	(-)二〇・七	(-)二〇・七	(-)二〇・七	(-)二〇・七	(-)二〇・七	(-)二〇・七	(-)二〇・七	(-)二〇・七	(-)二〇・七	(-)二〇・七	(-)二〇・七
五一	(-)二二・六	(-)二二・八	(-)二二・八	(-)二二・八	(-)二二・八	(-)二二・八	(-)二二・八	(-)二二・八	(-)二二・八	(-)二二・八	(-)二二・八	(-)二二・八	(-)二二・八	(-)二二・八
五二	(-)二八・八	(-)二四・五	(-)二〇・七	(-)二〇・七	(-)二〇・七	(-)二〇・七	(-)二〇・七	(-)二〇・七	(-)二〇・七	(-)二〇・七	(-)二〇・七	(-)二〇・七	(-)二〇・七	(-)二〇・七
五三	(-)二二・六	(-)二二・七	(-)二二・七	(-)二二・七	(-)二二・七	(-)二二・七	(-)二二・七	(-)二二・七	(-)二二・七	(-)二二・七	(-)二二・七	(-)二二・七	(-)二二・七	(-)二二・七

内外から一、五〇〇〜一、六〇〇ミリメートル内外である。雨の多い月は台風の影響を受ける八、九月ごろで、少ない月は二、三月ごろである(冬期間の雪も雨量に取り扱われる)。ただし二、三月ごろは積雪として残り深雪としては最大となる。

### 3 霜・雪

雪は雨量として取り扱われたが、北国の日常生活と関係が深く、半年間も雪に接するので、初雪、終雪を表に示したが、霜についても農業などに大きな影響があるところから日常生活に大切な事項である。

初霜は九月下旬から十月中旬に降り、晩霜は五月中旬までに終わる。

#### 一 初霜・雪、終雪・霜表

年	区分		根雪終日	終雪	晩霜	無霜期間	初霜	初雪	根雪初日
	月	日							
明治三三	三	九	四	四	四	九	九	一	一
四一	四	一	四	四	四	九	九	一	一
四二	四	二	四	四	四	九	九	一	一
四三	四	三	四	四	四	九	九	一	一
四四	四	四	四	四	四	九	九	一	一
大正二	四	五	四	四	四	九	九	一	一
三	四	三	四	四	四	九	九	一	一
四	四	四	四	四	四	九	九	一	一
五	四	五	四	四	四	九	九	一	一
六	四	六	四	四	四	九	九	一	一
昭和二四	四	一	四	四	四	九	九	一	一
二七	四	一	四	四	四	九	九	一	一
三〇	四	一	四	四	四	九	九	一	一
三三	四	一	四	四	四	九	九	一	一
三六	四	一	四	四	四	九	九	一	一
三九	三	二	三	三	三	八	八	一	一

### 第二章 象

年月別最深積雪について昭和二十八年以降は次表のとおりである。

#### 二 最深積雪

年	昭和二八		一月	二月	三月	四月	一二月	年
	月	日						
二九	三	〇	八	一〇	一〇	三	一〇	九
三〇	三	一	八	一〇	一〇	三	一〇	九
三一	三	二	八	一〇	一〇	三	一〇	九
三二	三	三	八	一〇	一〇	三	一〇	九
三三	三	四	八	一〇	一〇	三	一〇	九
三四	三	五	八	一〇	一〇	三	一〇	九
三五	三	六	八	一〇	一〇	三	一〇	九
三六	三	七	八	一〇	一〇	三	一〇	九
三七	三	八	八	一〇	一〇	三	一〇	九
三八	三	九	八	一〇	一〇	三	一〇	九
三九	三	〇	八	一〇	一〇	三	一〇	九
四〇	三	一	八	一〇	一〇	三	一〇	九
四一	三	二	八	一〇	一〇	三	一〇	九
四二	三	三	八	一〇	一〇	三	一〇	九
四三	三	四	八	一〇	一〇	三	一〇	九
四四	三	五	八	一〇	一〇	三	一〇	九
四五	三	六	八	一〇	一〇	三	一〇	九
四六	三	七	八	一〇	一〇	三	一〇	九
四七	三	八	八	一〇	一〇	三	一〇	九

四二	三	三	四	三	四	一	一	九
四五	三	一	四	三	四	一	一	九
四八	三	一	四	三	四	一	一	九
四九	三	二	四	三	四	一	一	九
五〇	三	二	四	三	四	一	一	九
五一	三	三	四	三	四	一	一	九
五二	三	三	四	三	四	一	一	九

五三	五二	五一	五〇	四九	四八
六四	九二	一二六	九〇	一三八	九四
八〇	一一二	一一〇	一一八	一三八	一〇七
〇〇	一一四	九九	一〇二	一四三	一一六
四八	五八	七四	四五	一二〇	六〇
一三	三〇	三四	二二	四五	四九
四三	四七	五七	六一	六八	一四一
〇〇	一一四	一二六	一一八	一四三	一四一

(単位センチメートル)

4 風

一 風 向

滝川地区の風向は地形の関係から南風又は南西が多い。季節的には冬期間の北風・夏期間の南風ということがいえる。

年風向表(午前十時と午後二時の平均風向)

年	方向
大正三	北
明治三九	北東
三	東
二二	南東
三〇	南
二六	南西
三	南西
一三〇	北
二一	南西
八一	西
一〇	北西
七一	北西
一三	静穏

年月別最多風向表(午前九時の風向)

年	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	一〇月	十一月	十二月	年
昭和二八	東北東	南南西	南南西	北	南南西	南西	南西	南南西	南南西	北	北	南南西	南西
三一	南西	南南西	北	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南
三四	北・南	北	南	南南西	南南西	南南西	南南西	南南西	南南西	北	南南西	南南西	南西
三七	北	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南
四〇	北西	北北西	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南
四三	南西	北	南	南	南	南	南	南	南	北	南	南	南
四四	南西	西	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南
四五	西	北	南	南	南	南	南	南	南	北	南	南	南
四六													
四七	北	北北西	北北西	南南西	南南西	南南西	南南西	南南西	南南西	南	南	南	南
四八	北	南西	北	南	南	南	南	南	北	南	南	南	南
四九	北北西	北	北	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南
五〇	南西	北	南南西	南	北	南	南	南	南	南	南	南	南

五二	南西	南西	北	南西	南南西	南南西	南西	北	南西	南西	南西	南西
五二	北	北	南西	南南西	南南西	南南西	南南西	南南西	南南西	南南西	南南西	南南西
五三	南南西	北北西	北北西	南南西	南南西	南南西	南南西	西北西	南南西	南南西	南南西	南南西

二 風 速

月平均風速は四・五月がもっとも強く最近の数値では四メートル前後であり、他の月は二・三メートル前後が普通である。四・五月は温帯性低気圧による非常に乾燥した風が南西方面から吹く。

最大風速は熱帯性低気圧(台風)の来る年で九月ごろ襲来するものが雨量を伴い強力なものである。昭和二十九年九月二十六日の十五号台風は、平均風速最大、南南西の風三一・四メートル(岩見沢測候所二十二時四十分のもの)瞬間風速三九・六メートルにも達するもの

であったが、滝川は台風の目に入ったので、さらに高い数値を示したものとされる。

風 力(午前十時と午後二時の平均回数)

年	風種	静穏	軟	風	和	疾	強	烈	台風
明治三九		一	一九	一〇三	九二	一五〇			
大正三		一	一〇三	一七三	二八	四九			
		一	一三八	一七五	二二	二九			
		一	一〇三	一七三	二八	四九			
		一	一三八	一七五	二二	二九			

(北海道気候一班による)

年	月	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	一〇月	十一月	十二月
昭和二八		九・五	一〇・〇	一三・五	八・〇	八・九	六・五	一・二	七・二	四・〇	六・七	七・五	六・三
二九		二・九	七・一	九・四	一〇・三	一三・四	九・一	八・七	七・五	六・二	六・三	七・三	九・八
三〇		六・七	六・九	二・〇	一〇・一	七・一	一〇・七	六・九	七・四	六・二	八・五	四・五	〇・五
三一		九・八	九・八	二・七	二・五	三・〇	六・五	四・六	五・七	五・四	八・五	一・〇	八・九
三二		五・九	一・八	〇・七	八・五	八・〇	九・七	六・九	七・八	七・三	七・六	五・八	六・一
三三		一・〇	五・五	六・六	八・九	二・五	九・四	七・三	五・九	七・六	七・八	六・三	六・三
三四		八・五	五・五	五・四	三・九	七・六	五・二	六・三	五・九	七・三	七・九	六・三	五・四
三五		一・四	一・八	一・九	一・九	七・三	六・〇	二・五	六・七	二・三	六・五	七・四	二・二
三六		一・六	一・五	一・二	二・一	一・四	四・九	一・九	二・七	二・四	三・七	四・五	一・二
三七		一・五	一・七	一・五	二・〇	一・七	四・九	一・九	二・七	二・四	三・七	四・五	一・二
三八		一・〇	一・〇	一・五	二・〇	一・七	四・九	一・九	二・七	二・四	三・七	四・五	一・二
三九		八・五	〇・〇	五・五	九・七	八・一	五・九	六・七	七・五	九・五	八・〇	九・三	八・二
四〇		一・三	一・〇	一・七	一・〇	一・八	七・五	七・三	七・五	九・五	八・〇	九・三	八・二
四一		一・五	九・七	〇・七	一・〇	一・九	七・五	七・三	七・五	九・五	八・〇	九・三	八・二
四二		二・〇	八・五	一・〇	一・四	一・五	九・五	七・五	七・五	九・五	八・〇	九・三	八・二



年	月	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	一〇月	十一月	十二月	年
昭和二八		七七	八三	八一	七四	七五	八一	八一	七九	七六	七六	八六	八六	八〇
三〇		七七	八三	八一	七五	七五	七八	七八	八一	七八	八〇	七九	八五	八三
三二		八五	八五	八二	七四	六二	七八	八一	八三	七九	七八	七九	八五	八三
三四		八八	八七	八一	七五	七八	八一	八八	八一	八五	七八	八四	九五	八三
三六		八五	八二	八一	七四	七八	八一	八八	八一	八五	七八	八四	九五	八三
三八		七九	七九	七九	七五	六九	八一	八五	八一	八三	七八	八四	八六	八一
三九		八五	八〇	八〇	七〇	六六	七八	八五	八九	八四	八三	八七	八八	八一
四〇		八七	八三	七六	六九	六六	八三	八五	八九	八四	八三	八七	八八	八一
四一		八三	八三	八一	七三	六九	八三	八五	八九	八四	八三	八七	八八	八一
四二		八三	八三	八一	七三	六九	八三	八五	八九	八四	八三	八七	八八	八一
四三		八四	八三	八一	七四	七〇	八二	八五	八九	八四	八三	八七	八八	八一
四四		八四	八三	八一	七四	七〇	八二	八五	八九	八四	八三	八七	八八	八一
四五		八四	八三	八一	七四	七〇	八二	八五	八九	八四	八三	八七	八八	八一
四六		八二	八〇	七六	七二	六六	八〇	八四	八八	八三	八二	八六	八七	八一
四七		八二	八〇	七六	七二	六六	八〇	八四	八八	八三	八二	八六	八七	八一
四八		八二	八〇	七六	七二	六六	八〇	八四	八八	八三	八二	八六	八七	八一
四九		八二	八〇	七六	七二	六六	八〇	八四	八八	八三	八二	八六	八七	八一

湿度は春の雪解から初夏にかけて低く、冬期間に高い。年月別平  
年月別平均湿度(単位パーセント)

均湿度は次に示すとおりだが、日最小湿度は昭和三十五年四月三十  
日の二三パーセントである。

5 湿度

五三	一・四	一・三	一・九	二・七	三・一	二・四	二・五	二・〇	二・〇	一・八	二・八	二・一	二・七	二・〇
五二	二・二	二・四	三・〇	二・五	三・〇	二・八	二・八	二・七	二・七	二・七	二・九	二・三	二・三	一・七
五一	一・七	二・二	二・七	二・九	三・八	二・九	二・九	二・八	二・七	二・七	二・六	二・六	二・六	二・四
五〇	二・二	二・二	二・六	二・九	二・九	二・九	二・九	二・八	二・七	二・七	二・七	二・七	二・七	二・四
四九	一・四	一・八	二・三	二・九	二・九	二・九	二・九	二・八	二・七	二・七	二・七	二・七	二・七	二・四
四八	二・四	二・七	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三
四七	二・二	二・八	二・四	三・四	三・六	三・六	三・六	三・六	三・六	三・六	三・六	三・六	三・六	三・六

五〇	八四	八一	七九	七八	八〇	八六	八二	七六	七八	八四	八〇
五一	八二	七八	七三	六八	八二	八〇	八一	八二	七九	八三	八三
五二	八四	八一	七九	七四	七六	七八	八一	七九	八二	八四	七九

6 天 候

天候は年間を通じ晴よりも曇の日が多い。しかし最近の年日照時 間は著しく増加の現象を示している。

年月別日照時数(単位時間)

年	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	一〇月	十一月	十二月	年間	四月間
昭和二八	七六	六二	三七	一七	五二	一四	一四	一八	一八	三三	四七	三七	一、五九	一、六四
三〇	六〇	五二	三三	一五	四八	一七	二二	一七	一六	三〇	四三	三九	一、五九	一、六四
三二	六三	五二	四四	一七	四二	一五	二〇	一四	一五	三三	四三	三九	一、五九	一、六四
三四	六三	五二	四四	一七	四二	一五	二〇	一四	一五	三三	四三	三九	一、五九	一、六四
三六	七八	一〇	一五	一七	三三	一七	一七	一六	一五	三三	四三	三九	一、五九	一、六四
三七	六六	五九	四二	一七	四二	一五	二〇	一四	一五	三三	四三	三九	一、五九	一、六四
三八	六二	五二	三三	一五	四八	一七	二二	一七	一六	三〇	四三	三九	一、五九	一、六四
三九	七二	五二	三三	一五	四八	一七	二二	一七	一六	三〇	四三	三九	一、五九	一、六四
四〇	七二	五二	三三	一五	四八	一七	二二	一七	一六	三〇	四三	三九	一、五九	一、六四
四一	七二	五二	三三	一五	四八	一七	二二	一七	一六	三〇	四三	三九	一、五九	一、六四
四二	七二	五二	三三	一五	四八	一七	二二	一七	一六	三〇	四三	三九	一、五九	一、六四
四三	七二	五二	三三	一五	四八	一七	二二	一七	一六	三〇	四三	三九	一、五九	一、六四
四四	七二	五二	三三	一五	四八	一七	二二	一七	一六	三〇	四三	三九	一、五九	一、六四
四五	七二	五二	三三	一五	四八	一七	二二	一七	一六	三〇	四三	三九	一、五九	一、六四
四六	七二	五二	三三	一五	四八	一七	二二	一七	一六	三〇	四三	三九	一、五九	一、六四
四七	七二	五二	三三	一五	四八	一七	二二	一七	一六	三〇	四三	三九	一、五九	一、六四
四八	七二	五二	三三	一五	四八	一七	二二	一七	一六	三〇	四三	三九	一、五九	一、六四
四九	七二	五二	三三	一五	四八	一七	二二	一七	一六	三〇	四三	三九	一、五九	一、六四
五〇	七二	五二	三三	一五	四八	一七	二二	一七	一六	三〇	四三	三九	一、五九	一、六四
五一	七二	五二	三三	一五	四八	一七	二二	一七	一六	三〇	四三	三九	一、五九	一、六四
五二	七二	五二	三三	一五	四八	一七	二二	一七	一六	三〇	四三	三九	一、五九	一、六四
五三	七二	五二	三三	一五	四八	一七	二二	一七	一六	三〇	四三	三九	一、五九	一、六四

晴雨などの日数は次のとおりである。快晴は雲量二五パーセント以下、晴天は雲量二五〜七五パーセント、曇天は雲量七五パーセント以上として午前九時又は十時、観測し、降水現象に関係なく記録されていたが、昭和三十九年以降は雲量と天気状況により区分されるようになった。

年別晴曇・雨雪日数

年	区分		年	区分	
	快晴(九時)	晴天(九時)		曇天(九時)	雨天
昭和二八	七二	八五	二〇八	一〇四	一〇〇
二九	七一	六一	二三三	九一	一〇〇
三〇	七二	五三	二四〇	一二五	九八
三一	八八	五〇	二二八	一一三	九八
三二	八三	五〇	二三二	一一三	九六
三三	五二	八三	二三〇	一三〇	一〇〇
三四	三四	六七	二六四	一四三	九八
三五	五一	七三	二四二	一四三	一〇〇
三六	四四	六四	二五七	一五四	一二五
三七	四一	七二	二五二	一五一	一二五
三八	五五	七一	二三九	一四〇	九八
明治三三	一〇時	一〇時	一〇時	雨天	雪日
三九	四三	一六二	二〇三	四四	一
四一	三八	九二	二三〇	九七	九七
四二	一七	一〇八	二二二	七四	七七
四三	一	一七四	二六二	七六	七六
四四	一	一七四	二四四	四	一七
四二	一	一七四	一九四	〇四	一七
四三	一	一五三	二一五	〇八	一三
四四	一	一四九	一七九	二六	二九
大正	一三	一六六	一八六	五八	五四

第二章 気象

7 地温

気象条件は農作物に大きく影響しているが、土地の温度は成長に大切な条件である。畑作・水稲関係の地温・水温は次の表のとおりである。

年	区分	快晴(九時)	晴天(九時)	曇天(九時)	雨・雪(九時)	雨日	雪日
昭和三九	四〇	五二	六五	一四六	一〇三	一三九	一〇八
四一	四一	四一	七四	一三二	一一八	一三一	一三〇
四二	四二	六三	八一	一二三	一一〇	一四〇	一二四
四三	四三	六〇	七二	一二四	一〇六	一四〇	一一〇
四四	四四	五二	八七	一一八	一〇八	一四九	一一〇
四五	四五	八〇	八二	一一〇	一〇七	一四六	一一八
四六	四六	五五	九五	一一〇	一〇二	一四六	一一八
四七	四七	五七	八二	一一〇	一〇三	一三七	一一九
四八	四八	五三	九四	一一〇	一〇三	一三七	一一九
四九	四九	四二	一〇九	一一〇	一〇三	一三七	一一九
五〇	五〇	六三	八〇	一一〇	一〇三	一三七	一一九
五一	五一	六四	七五	一一〇	一〇三	一三七	一一九
五二	五二	四八	七七	一一〇	一〇三	一三七	一一九

月平均畑地温(°C)

年	月	月平均畑地温(°C)												
		五月	六月	七月	八月	九月	一〇月	五月	六月	七月	八月	九月	一〇月	
昭和二七		九・七	一六・二	二〇・七	二一・一	一六・三	九・九	九・四	一八・四	一七・六	一八・四	二〇・三	一六・五	一〇・六
二八		九・九	一五・五	一九・二	一九・八	一五・六	九・四	九・四	一九・八	一七・五	一九・八	二〇・三	一五・六	一〇・七
二九		八・九	一二・八	一八・一	一九・八	一七・五	九・七	九・四	一九・三	一五・六	一九・八	二〇・九	一五・八	一〇・八
三〇		八・九	一五・三	二一・五	二一・〇	一六・二	九・六	九・六	一九・二	一五・二	一九・七	二〇・九	一五・八	一〇・八
三一		〇・六	一四・七	一八・一	一八・四	一六・五	九・六	九・六	一九・二	一四・一	一九・三	二〇・二	一五・二	一〇・六
三二		〇・二	一四・〇	一九・一	二〇・一	一六・五	九・九	九・九	一九・九	一四・三	一九・四	二〇・四	一五・〇	一〇・五
三三		九・九	一五・六	一九・五	一九・八	一六・〇	九・九	九・九	一九・七	一四・七	一九・三	二〇・五	一五・〇	一〇・五
三四		〇・八	一五・三	一九・二	二〇・一	一六・〇	九・九	九・九	一九・七	一四・七	一九・三	二〇・五	一五・〇	一〇・五
三五		九・五	一四・五	一九・〇	二〇・一	一六・〇	九・九	九・九	一九・七	一四・七	一九・三	二〇・五	一五・〇	一〇・五
三六		〇・六	一六・四	二〇・四	二一・一	一六・七	九・八	九・八	一九・八	一四・八	一九・四	二〇・六	一五・一	一〇・五
三七		一・五	一五・三	一九・八	二〇・二	一六・七	九・八	九・八	一九・八	一四・八	一九・四	二〇・六	一五・一	一〇・五
三八		〇・四	一四・九	一九・六	二〇・五	一六・八	九・八	九・八	一九・八	一四・八	一九・四	二〇・六	一五・一	一〇・五
三九		〇・八	一五・〇	一九・七	二〇・六	一六・九	九・八	九・八	一九・八	一四・九	一九・五	二〇・七	一五・二	一〇・五

注 畑地温は地中一〇センチメートルの観測値・観測時刻午前九時(昭和二七年は十時)・△道立中央農業試験場原種農場観測資料▽  
 月平均灌漑水温・稻田水温・稻田地温

年	月	月平均灌漑水温(°C)												
		六月	七月	八月	六月	七月	八月	六月	七月	八月	七月	八月		
昭和二八		一六・七	一九・三	一九・八	一八・七	二〇・七	一九・一	一九・七	二〇・七	一九・一	一九・四	一九・七	一九・七	一九・七
二九		一六・七	一九・三	一九・八	一八・七	二〇・七	一九・一	一九・七	二〇・七	一九・一	一九・四	一九・七	一九・七	一九・七
三〇		一五・二	一九・九	一九・九	一八・四	二〇・九	一九・一	一九・七	二〇・七	一九・一	一九・四	一九・七	一九・七	一九・七
三一		一四・七	一九・九	一九・九	一八・四	二〇・九	一九・一	一九・七	二〇・七	一九・一	一九・四	一九・七	一九・七	一九・七
三二		一四・七	一九・九	一九・九	一八・四	二〇・九	一九・一	一九・七	二〇・七	一九・一	一九・四	一九・七	一九・七	一九・七
三三		一五・二	一九・九	一九・九	一八・四	二〇・九	一九・一	一九・七	二〇・七	一九・一	一九・四	一九・七	一九・七	一九・七
三四		一六・三	一九・八	一九・八	一八・四	二〇・八	一九・一	一九・七	二〇・七	一九・一	一九・四	一九・七	一九・七	一九・七
三五		一七・二	一九・八	一九・八	一八・四	二〇・八	一九・一	一九・七	二〇・七	一九・一	一九・四	一九・七	一九・七	一九・七
三六		一六・一	一九・八	一九・八	一八・四	二〇・八	一九・一	一九・七	二〇・七	一九・一	一九・四	一九・七	一九・七	一九・七
三七		一六・一	一九・八	一九・八	一八・四	二〇・八	一九・一	一九・七	二〇・七	一九・一	一九・四	一九・七	一九・七	一九・七
三八		一四・七	一九・八	一九・八	一八・四	二〇・八	一九・一	一九・七	二〇・七	一九・一	一九・四	一九・七	一九・七	一九・七
三九		一四・七	一九・八	一九・八	一八・四	二〇・八	一九・一	一九・七	二〇・七	一九・一	一九・四	一九・七	一九・七	一九・七

年 月	月平均灌溉水温(℃)			月平均稻田水温(℃)			月平均稻田地温(℃)		
	六月	七月	八月	六月	七月	八月	六月	七月	八月
昭和四〇	一三・二	一七・一	一六・五	一八・九	一九・六	一七・二	二〇・〇	一九・四	一九・六
四一	一五・〇	一九・六	一九・九	二一・〇	二一・〇	一六・七	二一・四	二一・四	一九・一
四二	一六・二	一九・三	一九・九	二〇・七	二〇・七	一七・六	二〇・四	二〇・四	一九・六
四三	一五・六	二一・五	二〇・九	二二・九	二二・八	一七・四	二〇・七	二〇・七	一九・六
四四	一六・三	二一・八	二二・三	二〇・八	二〇・八	一七・四	二〇・八	二〇・八	二〇・一
四五	一五・八	二一・一	二〇・五	二二・三	二二・三	一六・八	二〇・九	二〇・九	二〇・二
四六	一五・二	二一・四	一九・四	二二・六	二二・六	一六・八	二〇・九	二〇・九	二〇・二
四七	一八・八	二一・八	二〇・七	二二・七	二二・七	一六・八	二〇・九	二〇・九	二〇・二
四八	一八・四	二一・四	一九・九	二二・七	二二・七	一六・八	二〇・九	二〇・九	二〇・二
四九	一八・八	二一・八	一九・九	二二・七	二二・七	一六・八	二〇・九	二〇・九	二〇・二
五〇	一八・八	二一・八	一九・九	二二・七	二二・七	一六・八	二〇・九	二〇・九	二〇・二
五一	二〇・四	二二・四	二〇・八	二二・七	二二・七	一六・八	二〇・九	二〇・九	二〇・二
五二	二一・一	二二・一	二〇・五	二二・三	二二・三	一六・八	二〇・九	二〇・九	二〇・二

注 観測時刻午前九時・月平均稻田地温は昭和四七年までは五センチメートル昭和四十八年以降( )内は二〇センチメートルの観測・表中空欄は月全日数に達しないため除く(道立中央農業試験場原種農場観測資料)。

## 第二節 岩見沢測候所滝川気象通報所

岩見沢測候所滝川気象通報所(南滝の川二五四の一番地)

水害対策のため降雨量・洪水の予報・警報など迅速に行わなければならない。

そのためには奥地の降水状況や変化など資料収集の前進基地としていくつかの気象通報所が必要となり、昭和三十三年十月一日滝川をはじめ幾春別・名寄・富良野の各気象通報所が設置された。

気象通報所の業務内容は、昭和五十三年度からは地上気象の観測及びその整理を廃止して無線ロボット、雨量計による観測の成果の

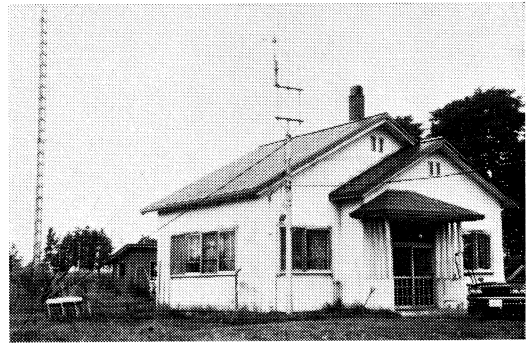
受信及びその整理、天気予報・気象注意報・気象警報及び実況気象報の連絡、気象官署との無線電気通信の送受信となっているが、社会的に寄与している気象台の末端機構である。滝川気象通報所には職員が三名配置されている。

業務上の気象観測網施設としては

### 一 ロボット雨量観測所

重要河川上流山岳地帯の人による観測が困難な地点に設ける施設で、毎時間超短波無線電信によって雨量の積算値が自動的に通報される無人観測所である。この電波はつねに最寄気象官署や気象通報所でキャッチされ、そこから無線電話で上部官署へ速報される。

### 二 自記雨量観測所

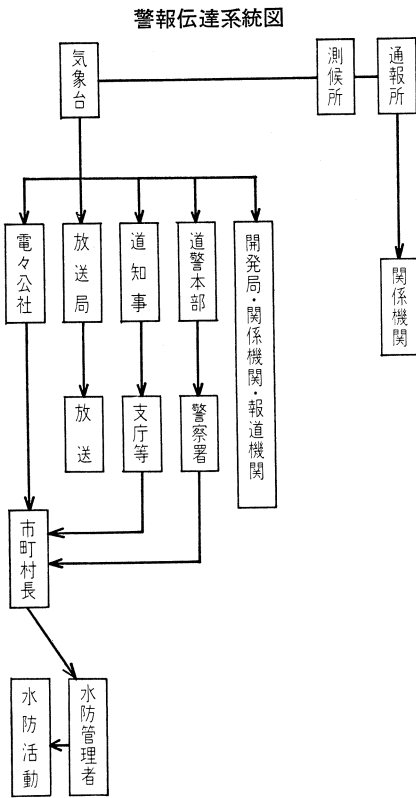


滝川気象通報所

転倒柵型自記雨量計を設備する観測所で、重要河川の流域に配置され、気象職員以外の人たちに委託して観測が行われる。観測値は毎日定時に、また異常時には随時に電話あるいは電報で速報される。また、冬季間は自記雪量計による。

三 無線電話系

大雨・洪水のような災害時にも連絡できるような気象通報所と上部気象官署との間に設置されている。滝川気象通報所との通信系は札幌管区気象台、岩見沢測候所、旭川地方気象台との三カ所である。



昭和三十三年十一月十一日、滝川気象通報所庁舎及び宿舍が完成し、翌三十四年六月十二日岩見沢測候所滝川気象通報所の開所式が行われ、六月二十一日から観測が開始された。滝川気象通報所系統は次のとおりである。

気象官署	測候官署	気象通報所	観測所	自記雨量計観測所
札幌管区 気象台	岩見沢 測候所	滝川気象 通報所	ロボット雨量 観測所 北幌加山 (新十津川町) 二ツ岩山 (芦別市) 神威山 (赤平市)	—

中枢気象官署では普通の広範な天気図のほかに、地域的天气図を細密に作成し、各地から収集された降水量の実況資料を検討したうえで、必要な予報・警報を発表する。特に水害のための予報は、従来的一般天気予報以上に降雨の量や分布、強弱変化などに対する要求も強いので、各河川流域の雨量分布の方向や、代表地点の観測値から一定地域の雨量予想をするなど調査研究が行われている。

岩見沢測候所滝川気象通報所歴代所長

氏名	着任年月日	退任年月日
初代 渡辺 義夫	昭和三三・一〇・一	昭和四〇・三・三一
二代 大友 勇助	〃 四〇・四・一	〃 四四・三・三一
三代 能登谷 勇	〃 四四・四・一	〃 四八・三・三一
四代 渋谷 一	〃 四八・四・一	〃 五一・三・三一
五代 橋詰 吉雄	〃 五一・四・一	現在

庁舎 八二・六五平方メートル 官舎 二棟 八九・六平方メートル  
敷地 二、六四〇平方メートル

## 第三章 生 物

### 第一節 昔の動植物について

生物は環境に左右される。太古の昔から天変地異を繰り返し、それなりの生物が地球上に生き続けている。

ある地質学者の話に「むかし、この世に高さ三〇メートルもあつたヒカゲノカズラがはえていたというようなことがある。いまでは樽前山などのすそ野の森にポヤポヤとはえている体長数センチばかりのこの石松類が、そんなに大きかったとは誰も想像がつかないだろう。さらに話が石炭期という時代になって、この巨大なヒカゲノカズラの森には、羽根の長さが一フィートを越えるようなトンボがゆうゆう飛び回っていた」ということや「洪積世という時代には日本列島にジラフやパレオロクソドン象と呼ばれる古代象の仲間が住んでいたことや、その前の第三紀の北海道にはシュロの林があり、バナナの茂る森があつた」など、地質学者が一つ一つ確かな証拠をもとに話ができるという。ここ滝川の地下深く眠る石炭を含む石狩層群はこれらの時代を経たものである。

時が移り幾度となく地盤の隆起・沈降があつて現在は海底から隆起した状態で亜寒帯の気候にあるこの滝川にも、それなりの植物群

が繁茂する地となつた。

滝川の地一帯をおおつていた原始林も、屯田開拓の鋸が下ろされて以来、どんどん開墾され立木の伐採・焼却に専念した屯田兵及びその家族によつて一〇年たらずのうちに、さしもの原始林地帯は一面稔り豊かな農耕地に生まれ変わった。

石狩川と空知川の沿岸は沖積層で河川跡地の湿地帯は茅・芦が密生し、その近くには湿地に強い柳・ヤチダモ・ハンノキなどが自生し、洪積層に当たる一の坂以北の台地には乾燥地に育つシナノキ・樺・松類などと笹が一面に広がつていたといわれる。

現在はどうであろう。市域の約五〇パーセントは水田を主体とする田畑であり、山林・原野は一三パーセントに過ぎない状況である。

屯田入植の約九十年前の景観を知るには現在数名健在である屯田移住家族や古老の談話か当時の資料によるほかはない。

明治二十四年発行の北海道殖民地撰定報文に「空知太・ヨトエボツケ間原野」についての植物が述べられている。

樹木ハ柳、榆、山胡桃、黄檗、桂、刺楸、赤楊、白楊其ノ他ノ雜木蔚然繁茂シ加之葡萄、獼猴桃等ノ蔓木之ヲ纏繞シ盛夏ノ際ハ樹下昼尚ホ暗キヲ覺ユルカ如キ密生多ク間々僅ニ疎林アリ其間又所々草原アリテ唐草、蕨、草蓆、艾、劉寄奴草、茅、施花、小薊、ヨブスマサウ、箬等蕪乎トシテ叢生シ或ハ粗生シ一見以テ其良農場トナルヘキヲ知ル

とあり、滝川地区の植物の様子がわかる。またこの樹林地帯は樹木が密生して高さ二〇メートル、大木となると直径一メートル以上のものが随所にあり、鋸を入れても手におえないものもあつたといわ

れる。

明治二十二年の西村直一の「北海道紀行」にも「市街地ト定マリ居ルハ二十坪一本位ノ蒼々タル樹木地ニシテ「赤ダモ」「ヤチダモ」等ノ樹木ヲ多シトス。」とある。

開拓者は小木は唐鋸や鋸で伐採し、大木は斧、鋸で伐採したり、立枯法といって立木の地面に近い所の表皮をぐるりと切り取って枯らしてから焼却し、農耕地にしたため、さしもの原始林も平野部では姿を一変させたのである。

動物については熊・鹿・狐・狸・野兎などが生息していた。また川魚なども多く開拓者の生活に潤いを与えた。

明治二十二年九月、上川を視察した当時の永山北海道長官の記録に

字良畝内<sup>ワカノクサノウチ</sup>覚脂<sup>ササ</sup>を経て坂あり熊穴坂と云ふ。昨年此地を開墾するに当り囚徒一大土窟<sup>オホツツ</sup>を発見す。皆云ふ是れ古昔源廷尉の此地方を過ぎりし時住居せし跡ならんと、偶々一土人來り之れを見て曰く彼の懼るべき熊の窟なり、蓋し昨年(十九年を云ふ)迄棲息せしものならんと。是れに由り字して熊穴坂と言へり。(中略)又江部乙の板橋を渡り前途に長坂あり頂上高さ海面を抜く三十八尺なり。然れども其勾配頗る低く以て車を通ずべし。坂のある処狼谷と云ふ。常に狼糞あるを以て此名あり。進んで須磨馬内ニ至る。

とある。「熊」はエゾヒグマであり雑食性で環境に強い動物であるが、上川道路の開削が始まって以来、山奥に居を移したものとと思われる。開拓当初は熊が出た話はよくあった。江部乙屯田家族吉沢甚右衛門書簡に

熊の害ですが、この恐るべき熊は兵村内に度々現われ、親子三頭連くらしいで作物を荒らし、玉蜀黍の如きは悉皆熊に食われた例もあります。今日まで数頭

の熊を得た様で、現に二、三日前に七尺以上の大熊を射獲り、私も肉六百匁代金九十錢で買受け爾來素食(くすり食い)をしております。けれども今日ではさのみ熊を恐れる者はなく平気なものです。熊が出た話があるとこれを射ち取るうと、壮年者は追い廻り大ていは射ち取り、他へは出しません。六尺以上の大熊で代金は三十円余であります。」(明治二十九年十二月十四日付)

また滝川屯田家族風穴カン談としては

弾があるので火箸にボロを巻いて、それに弾をのせて火をつけて、下に水をおくと鉛がとけてチョビン・チョビンとこれに落ちるので、丸くなり散弾になったんです。それを使って熊をとりに行ったので、熊がでると「上田・上田」と呼ばれたものです。

と記録にあるが、東滝川についても「そのころは全くの原始林で「熊の荒山」と呼ばれていたもので、春秋の季節に四・五人ぐらいでゼンマイや蕨採り、葡萄、コクワ、舞茸採りが見えたものですが、必ず熊に出会ったといつて空手で帰ったものです。」

と明治三十六年に入植した内野むめの談話にある。しかし大正に入ってから熊の話は少なく昭和に入ってから六年十月の西八丁目に現われた親子づれの子熊を撃ち獲った。また最も新しいのは三十七年十月東十九丁目に出没した雄約八歳三〇〇キロを射殺したものが郷土館に陳列されている。

最近が開発が進み山岳地帯に追い込まれたため市域では熊の話はないが、空知管内では毎年捕獲されている。昭和五十四年一月十日の北海道新聞夕刊では

昨年はヒグマにとってはク不幸なク年だった。空知管内で四月から十一月までの間に、ハンターたちに退治されたヒグマは二十六頭。過去五年間の最高を記録した。また一人で七頭を射殺したクマ撃ちの名人クもあり、その中には四百キロもあるクグリズリーク並みのバカでかいクマも含まれている。

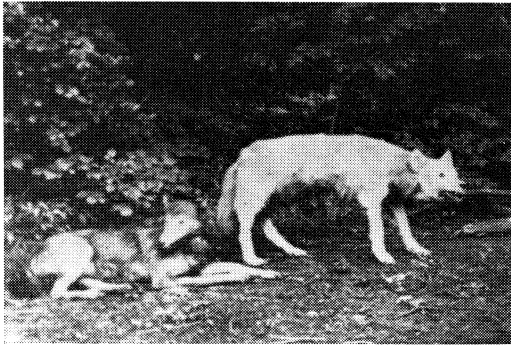
空知支庁の調べによると、空知管内には千六百五十人のハンターがおり、四月から十一月までにヒグマ退治のために同支庁から有害鳥獣駆除許可を受けたハンターは延べ八百五十五人で昨年（八百六十一人）とほぼ同じ。退治した頭数は昨年の十七頭から九頭も増えた。四十九年二十三頭、五十年十六頭、五十一年二十五頭だったので、ここ五年間の最高。

このうち二十頭が夕張山系で、その中でも芦別市内が多く十一頭。そのほかは樺戸山系などだ。オス十六頭、メス十頭（子グマ六頭を含む）で、体重は親グマの平均で百四十キロ（推定平均年齢五歳）。時期別に見ると、六月から十一月の、クマが活動するク危険期は七頭で、四月と五月が圧倒的に多く、四月だけで十三頭が殺された。これはハンターがあらかじめクマの住みかとなる穴を見つけておき、融雪期に腹をすかして歩き回るクマをねらい撃ちするためだ。（以下略）

永山武四郎の狼谷については興味のあるところである。かつて北海道にもエゾオオカミがおりシベリアの狼と同類であったが、和人の渡道以後は激減し、明治に入って大雪などのため餌となる鹿もいなくなり絶滅したといわれる。

安政三年五月松浦武四郎の蝦夷地探検記録に「狼と申すも近年迄はこれなく候へ共、此頃出来り候由土人は是を「ヲヲセカモイ」と申し候、此獸「ソラチ」より「ユフバリ」の山えかけて居り候由申し候」とあり。

また、翌安政四年五月二十八日石狩川上流のウエンベで「狼を見ること三度土人も必ず是を取らず



お お か み

とかや」とある。

内務省は御用係月形潔を主班として土地選定方を命じた。明治十四年五月一日「尻別山麓に至る。狼の徜徉するを見る。地味良きも運搬の便なし。」（北海道開拓秘録第三篇）とある。

開拓使では熊の皮五銭の買上げに対し狼の足四本で一〇銭という時があった。

エゾ鹿も開拓以来姿を見せていないが空知川縁の開墾に頭蓋骨や角が散乱していたという。

安政三年（一八五六）五月松浦武四郎がトック酋長のセッカウシの案内で石狩川を上り上川に向う途中にトックのセッカウシ宅に立寄ったその日に案内の一人であるトックトミハセが狩に出て雄鹿を、また妻が犬を使って鹿を追わせて鹿を獲って帰った記録がある。これをみても鹿が近辺山野に多かつたかがうかがわれるところである。

他の動植物について森秀太郎懐旧録に次のような記録がある。

長ラク雪籠リデ北海道ノ木ニハ葉ガ出来ルヂャローカト思フ程長ク枯山テ在  
タガ雪カ解ケルト谷地ニヨメ菜又ノ名ミヨヂ葉トモ云フ草カ生ヘ此ヲ採取シア  
ザミヤクグミナヲ採リダラメヲトル人々大喜ビ昨冬青物ノ不足ニ困ッテ居タ事  
トテ大ノ御馳走 網デウグイ捕リニ行ケバ水ト魚ト半分ト云フテヨイ位沢山居  
テ捕レル、

小谷テハマバガ釣レル、一日係ノ者等技師二人ト上徳富士地見ニ行タガ彼  
等ハ村田銃デ沢山小鳥ヲ落ス其中黒色ノキツムキヲ一番多ク捕タ（略）

移住ノ当時兎ノ多カッタ事、獺、モ沢山居ルト言フタルモ生タルヲ直接見タ  
ノハ只一度オシラリカ奥ノ川辺ニ木屋カテテ居タトキタ方見タ丈ジャ、栗鼠ハ  
馬鹿デ何時デモ見ルガ、貂ハ敏ク曾テ生タルヲ見タル事ナン、松本俊将が二十  
四年頃屯田給与地開ク時、銃デ狐取テ其肉食レタガ味ハヨクナン、獺ノ肉ハ尚不

味也。オンラリカ川出合テ獲タノヲ食バレタ事アッタ、二十九年頃ノ夏頃也。熊ノ肉ハ隣ノ上中デ食ベタガ始メ也(二十五年ごろ)(略)自分ト沢渡虎吉ハ魚釣リニ空知川ヘ行ク。一日二人デ鯉(注 ヤマベノ事)ヲ手桶ノ八分釣ツタ。爾来四十年ニナルガ、其日位釣ツタ事ハ始メノ終リデアッタ。婦リニ松本忠太(山天の峰尾屋)ガ八・九寸モアルウグイヲ四・五本釣ツテ居タノデ、初メテ北海道ノウグイヲ見タ。

高橋ト云フ男、年中漁斗リスルノデ、或時尾白利加川ロデ鱒網差シテ置イタラ、七尺以上ノ鮫ガ捕レテ、自分魚釣ニ行小屋ヘ立寄タレバ、肉ハ農場ヘ大部分売、皮ヲ干シテアッタガ、貂ノ如ニ班ガアツテ針ノ如ナ鱈ガアッタ。

肉ガ未ダ在テ酒モアリ、大ニ馳走ニナツタ。中々油ノ強イ味ノ美イモノデアッタ。(明治三十一年六月五日ナル事日誌ニ依リ知ル)

獺はニホンカワウソで近辺河川地にまた貂も生息していたといわれる。最近は山林地帯で野兔、鼬、狐(きたきつね)、蛇(青大将)は今でも見かけることがある。エゾタスキ、エゾリス、シマリス、エゾモモンガ(ムササビ)などは山地に生息している話は聞くが人目にはほとんどとまらない。

鳥については開墾され樹林地が田畑に切替わったため飛来する種類も減少し、市街地区近くでは限定した種類の小鳥しか見かけない。

春のヒバリ、桜鳥・カッコウに始まり夏にはモズ、池や沼、川にカワセミ・セキレイ・秋にはムクドリ・カケス・秋から冬にかけてはシジュウカラ・コガラ・ウソなどが飛来する。山間地帯ではこのほかにウグイス・ヤマバト・ミミズク・キツツキ・オオルリなどを見かける。雀とカラスはいつころに滅らさず開拓当初から親しみはあるが害鳥で農作物に被害を与える。鳩も一時ブームがあり飼いはたが放されて野鳥化して以来害鳥となっている。数多くの小鳥の生息

地及び渡来地であったこの地方も開発が進み、生活環境も変わり、農薬などによる昆虫・魚類の減少によりこの地から小鳥を遠ざけていつている。



くまげら



いたち



ちようざめ <小樽水族館蔵>

母なる川である石狩川を本流として第一の支流空知川、それらに注ぎ込まれる小中の河川に恵まれた滝川では、魚を得る絶好の場所で先住民族が住み、和人がこの場所を探検した時に四、五戸のアイヌが住んでおり、漁労に便利な地であった。開拓当初にはサケ・マスが時期になると川に差し込んだ棒が倒れないなどの話があるほど密集したサケの遡上であった。

秀太郎懐旧録にあるヤマベ、サメやイトウ・イワナ・ヤツメウナギなど古老の話ではよく聞くことであるが、サメはチョウザメのことと現在は遡上している話は聞かない。江部乙の語源は北海道蝦夷語地名解では『ユーベオツ』は『鮫居川』になっており、石狩川の旧流沼となりて流る川の意であるが、秀太郎の鮫を探った尾白利加川の河口から江部乙に当たるところである。

また空知川でも現在「鮫淵」という所があり、市内にも明神町空知町から空知川に流れる小川があった。アイヌ地名の「シユプオマナイ」で鮫の産卵場の意であって、当時は石狩川にも空知川にも相対の鮫がいたものと思われる。

日本動物図鑑の「ちようざめ」については次のとおり記している。

**しやうざめ** *Acipenser mikadoi Higendorf* 形細長クシテ、吻著シク延長シ、下面ニロアリ、二対ノ鬚ヲ以テ泥土ノ中ヲ搜索シテ食ヲ攝ル、背板七・八個、側板三・四個ニシテ、鱗間ノ皮膚ニハ大小不同ノ小鱗ヲ散在ス、灰青色ニシテ、下面ハ白色ナリ、我国ニテハ僅カニ天塩川及ビ石狩川ニ溯河スルノミニシテ、北日本ノ海ニテモ稀ニ漁獲セラル、肉頗ル美味ナルモ、漁獲セラルムコト稀ナルヲ以テ、コレガ食味ヲ知レルモノ殆ドナシ、体長一米。

**あむろいしやうざめ** *Acipenser schrencki Brandt* 本種ハだうりあてふざめ

ニ似タレド、ロハ割合ニ小サク、口角頭側縁ニ達セズ、鰓膜ハ峡部ニテ合スレド、左右ノ鰓裂ハ峡部ニ於テ合セズ、鬚ニ対ノ中外側ノモノハ内側ノモノヨリ僅カニ前方ニアリ、背鱗三八〜五三軟条、臀鱗二〇〜三二軟条、背板一一〜一七個、側板三二〜四七個、腹板七〜一〇個ニシテ、大骨板間ノ皮膚ニハ小鱗散布シ、殊ニ背板ト側板トノ間ニハ多数存ス、背面蒼黄色ニシテ、下面黄白色ナリ、中ニハ全体黄色ヲ呈スルモノアリ、黒竜江・うすりー江・興凱湖・松花江・おまつく海・日本海等ニ産ス、大キサハだうりあてふざめハ四米ニモ達スル大形ノモノアレド、本種ハ漸ク三米ニ達スル大サノモノナリ、肉ハ前種同様頗ル美味ナリ。

芦別市史に福家寅太郎翁が「住吉の鮫淵で見かけたのは人間の体ぐらいはあった。」と記されており、秀太郎日記による尾白利加川の七尺以上の鮫の話もあり、種類の異なる「あむろいちようざめ」又は「だうりあちようざめ」などもいたものであろう。

開拓が進みしだい水量が減り、鮫の遡上がなくなり、サケやマスも減り、さらに石狩川上流の開発が進むにしたがって汚水が流れ始めると魚の数も極端に減少していった。

**カッパの話** 河童（かっぱ）は想像上の動物である。そのカッパを



かわうそ

見たという川端実翁（新十津川町中央在住明治三十九年生れ）は今でも信じており次のように述べている。

小学校四年生の時だったと思うが、学校から帰ってすぐ四人の友達と泳ぎに行った。徳富川の川原まで行くと何か黒いものが砂利原に見える。一五〇メートル先から見えたので近づいてすぐそばまでいくと生きもののようだ。皆びっくりして立ち止った。色は灰色をしていた。一・二メートルの傍まで子供たちが近づいたのにすぐ起きないで顔だけこちらに向けた。それから夏の陽の照る石原で寝ているところを起こされたかのように立ち上がった。それを見て「カッパだ」と思った。四年生の我々と同じくらいの背があった。手足も同じように見えた。シッポはなかったと思うし、皿はよくわからなく体にも何もついていなかったように思う。毛もあるように見えなかった、すぐそばにいて見たので間違っていないとは思うが驚いた。ギロツと我々の方を見てから川の方へスタスタと立って歩き出し足速やに川に入って見えなくなった。今七三歳だが今でも忘れない事の一つだ。これは大正四・五年ごろの事だが徳富橋の少し上の方で長名という家の裏の方に当たる。当時の川はそう深くはなかったが川幅もあり広がった。そのころはよくカッパの話があつて年に三・四回は出た話を聞いた。石狩川の中島や惣富地川とかに出た話だ。私はこの一度しか見ていないが、足は子供ぐらい長いし二本足で歩いて川に入った。手も同じように見えただあれはカッパだと今でも思っている。

## 第二節 滝川の動物

滝川に生息及び時おり見かける動物は次のとおりである。

### 脊椎動物哺乳綱

#### 一 翼手目

ひなこうもり科 ヤマコウモリ・ウサギコウモリ

きくがしらかうもり科 キタガシラコウモリ

#### 二 食虫目

とがりねずみ科 オオアシトガリネズミ

### 三 齧歯目

#### ねずみ科

エゾアカクマネズミ・エゾアカネズミ・エゾヒメネズミ・エゾヤチネズミ

#### うさぎ科

エゾモモンガ・シマリス・エゾリス  
エゾノウサギ

### 四 食肉目

#### いぬ科

エゾタヌキ・キタキツネ

#### くま科

ヒグマ

#### いたち科

イタチ・エゾイタチ・コエゾイタチ・エゾテン・カワウソ

### 五 偶蹄目

#### しか科

エゾシカ

### 爬虫綱

#### 一 蛇目

#### くさりへび科

マムシ

#### へび科

ヂムグリ・シマヘビ・アオダイショウ

#### 二とかげ目

#### かなへび科

コモチカナヘビ・カナヘビ

### 両棲綱

#### 一無尾目

#### あかがえる科

エゾアカガエル  
あまがえる科 アマガエル

#### 二有尾目

#### さんしょうお科

エゾサンショウウオ

### 節足動物甲殻綱

#### 十脚目

#### ざりがに科

ザリガニ

#### さわがに科

サワガニ

### 鳥綱

#### 一 燕雀目

#### すずめ科

スズメ・カラフトカワラヒワ・アオジ・ニウナイスズメ

#### ひばり科

ヒバリ・タヒバリ・セグロセキレイ・キセキレイ・ハクセキレイ

しじゅうから科 シジユウカラ・コガラ・ヒガラ・シマエナガ・ヤマガラ・

シロハラゴジユウガラ

ひたき科 キビタキ・オオルリ

うぐいす科 エゾセンニウ・オオヨシキリ

からす科 ハシボソガラス・ハシブトガラス・カケス

つばめ科 セウドウツバメ

むくどり科 ムクドリ・コムクドリ

みそさざい科 ミソサザイ・カワガラス

二 翡翠目

ひすい科 カワセミ

三 きつつき目

きつつき科 ヤマゲラ・エゾオオアカゲラ

四 杜鵑目

とけん科 カッコウ

五 ふくろう目

ふくろう科 フクロウ・コノハズク

六 鷲鷹目

わしたか科 ノスリ・トビ

七 鷲目

さぎ科 アオサギ

八 鳩目

はと科 キジバト

九 雁目

がんおう科 オオハクチョウ・ヒシクイ・マガン・カワアイサ・マガ

モ・コガモ・ヨシガモ・オシドリ・オナガカモ・アカハジ

十 しぎ目

しぎ科 キアシシギ・アオアシシギ

十一 鶴目

くいなる科 バン

十二 うずら目

きじ科 ウズラ

第三章 生物

魚類

無顎綱

一 八目鰻目

やつめうなぎ科 カワヤツメ・スナヤツメ

二 ちようざめ目

ちようざめ科 チョウザメ(近年は未確認)

硬骨魚綱

硬骨魚目

さけ科 イトウ・サクラマス・サケ・イワナ・ヤマベ

こい科 コイ・フナ・ウグイ・ヤチウグイ

どじょう科 エゾホトケ・ドジョウ・アカドジョウ・シマドジョウ

なまず科 ナマズ

いとよ科 トミヨ・イトヨ

わかさぎ科 ワカサギ

かじか科 ベロ・コホリカジカ・ノロカジカ

ひらめ科 カワガレイ

軟体動物腹足綱

一 柄眼目

まいまい科 エゾマイマイ

おかものあらい科 オカモノアラガイ

二 真瓣鰓目

いしがい科 カラスガイ

三 中腹足目

たにし科 マルタニシ

昆虫綱

一 直翅目

ばった科 ハネナガフキバタ・トノサマバタ・コバネイナゴ

きりぎりす科 ハネナガキリギリス・クサキリ・クビキリ・ササキリ

けら科 ケラ

こおろぎ科 エゾエンマコオロギ・エゾスズ・カンタン・エンマコオロ

まるむねはさみむし科 ハサミムシ・キハネハサミムシ

二 食毛目

けものじらみ科 ニワトリナカバジラミ・イネハジラミ・アタマジラミ・キモノジラミ・ケジラミ

三 とんぼ目

かわとんぼ科 カワトンボ  
いととんぼ科 エゾイトトンボ  
さなえとんぼ科 オニヤンマ・アオヤンマ・ルリボシヤンマ  
とんぼ科 オオヤマトンボ・シオカラトンボ・ヨツボシトンボ・エゾアカネ・アキアカネ

四 半翅目

かめむし科 エゾアオカメムシ(その他種類多し)  
あめんぼ科 アメンボ  
まつもむし科 マツモムシ  
みずむし科 コミズムシ(風船虫)  
せみ科 ニイニイゼミ・エゾハルゼミ・ミンミンゼミ・エゾゼミ・アカエゾゼミ・アブラゼミ・コエゾゼミ・トドノネオオワタムシ(雪虫)(他省略)

五 脈翅目

くさかげろう科 クサカゲロウ

六 鮮翅目

はもどきが科 リンゴハモドキ  
きばが科 パクガ(米の害虫)  
まるはきばが科 コクマルハキバガ  
どくが科 リンゴドクガ  
ひめはまきが科 ナシノヒメシンクイ・マメノシンクイ・アズキサヤムシ・リンゴシロハマキ  
めいが科 ニカメイガ  
かれはが科 オビカレハ  
やままゆが科 オオミスアオ・ヤママユ  
すずめが科 ウチスズメガ  
ひとりが科 キハラゴマダラヒトリ・ヒトリガ  
かのこが科 カノコガ

あげはちょう科

キアゲハ・アゲハ・オナガアゲハ・カラスアゲハ・ミヤマカラス

しろちょう科

モンキチョウ・モンシロチョウ・エゾスジグロ・スジグロチョウ・エゾシロチョウ・エゾヒメシロチョウ

しじみちょう科

ウスムラサキオビシジミ・オオミドリシジミ・ミドリシジミ・ベニシジミ

たてはちょう科

ヒヨウモンチョウ・ウラギンスジヒチョウモン・クジャクチョウ・ホソバヒヨウモン

七 鞘翅目

げんごろう科 ゲンゴロウ  
はねかくし科 ルリコガンラハネカクシ  
てんとうむし科 オオニジユウホシテントウ・ヒメアカホシテントウ・テントウムシ  
こめつきむし科 オオナガコメツキ

つつきのこむし科

ツツヤツツキノコムシ

かみきりむし科

ゴマダラカミキリ(その他多種)

ぞうむし科

コクゾウ  
コガネムシ・コンスジコガネ・アオカナブン

べにぼたる科

キタベニボタル・ホソベニボタル

八 膜翅目

すずめばち科 クロスズメバチ  
じがばち科 ジガバチ  
みつばち科 ミツバチ

九 双翅目

か科 アカイエカ・エゾヤブカ・シナハマダラカ・エスリカ  
ぶ科 キアシオオブユ・オオブユ  
はもぐりはえ科 イネハモグリバエ・イエバエ

蜘蛛綱

ふくろぐも科 フクログモ  
はえとりぐも科 マミジロハエトリグモ  
かにぐも科 フノジグモ・カザミグモ・アズチグモ  
みずぐも科 ミズグモ

こがねぐも科 オニグモ・アカオニグモ・カラスグモ・ナカムラオニグモ・ギバナオニグモ

〔監修北海道教育大学教授西田秀夫〕

### 第三節 滝川の植物

滝川に自生する植物を列記すると次のとおりである。

#### 羊歯植物

ひかげのかずら科 ヒカゲノカズラ

とくさ科 スギナ・キタスギナ・トクサ・ミズドクサ

わらび科 ワラビ

ぜんまい科 ゼンマイ・ヤマドリゼンマイ

おしだ科 コウヤワラビ・クサソテツ・ジュウモンジシダ・オンダ・ミヤマシダ・ヒメシダ

ししがしら科 シンガシラ

#### 種子植物

##### 裸子植物

いちよう科 イチヨウ

いちい科 イチイ(おんこ)

まつ科 アカトドマツ・アオトドマツ・エゾマツ・アカエゾマツ・カラマツ

いぬがや科 ハイイヌガヤ

##### 被子植物

##### 単子葉植物

らん科 ネジバナ・サルメンエビネ・ハクサンチドリ・ノビネチドリ・オオヤマサギソウ

あやめ科 ノハナシヨウブ・キシヨウブ

やまのいも科 タチドコロ

ゆり科 タチギボウシ・エゾゼンテイカ・ヤブカンゾウ・ツクバネソウ・マイヅルソウ・ユキザサ・チゴユリ・バイケイソ

### 第三章 生 物

ウ・キバナノアマナ・カタクリ・エンレイソウ・オオアマ  
ドコロ・オオバナノエンレイソウ(シロバナノエンレイソ  
ウ)・シオデ・オオウバユリ・クロユリ・アサツキ・ギョ  
ウジャニンニク(アイヌネギ)

いぐさ科 スズメノヒエ・スズメノヤリ

つゆくさ科 ツユクサ

うきくさ科 ウキクサ

さといも科 ミズバショウ・ザゼンソウ・コウライテンナンショウ

かやつりぐさ科 エゾアブラガヤ・ウシクサ・フトイ・ホタルイ・ピロウド  
スゲ・ショウジョウスゲ・アゼスゲ・ナルコスゲ・ヤマテ  
キリスゲ・ミズガヤツリ

いね科 カモガヤ・ドジョウツナギ・カヅノコグサ・ナガハグサ・  
クマイザサ・スズタケ・オオアワガエリ・スズメノテッポ  
ウ・コスカグサ・ヤマスカボ・エゾスカボ・イブキヌカ  
ボ・ヒメノガリヤス・ノガリヤス・キツネガヤ・オオウシ  
ノケグサ・スズメノカタビラ・ヨシ・ニワホコリ・ヒメシ  
バ・エノコログサ・キンエノコログサ・ススキ・ミズビ  
エ・イヌビエ・ムラサキエノコログサ・ハチジョウススキ

おもだか科 オモダカ

ひるむしろ科 ヒルムシロ・イトモ

がま科 ガマ

みくり科 ミクリ

ほしくさ科 ヒロハイヌノヒゲ

#### 双子葉植物

##### 離弁花類

みずき科 ミズキ

せり科 オオチドメ・ヒメチドメ・ウマノミツバ・セリ・シヤク・  
ヤブジラミ・エゾオオバセンキユ・ドクゼリ・オオハナウ  
ド・オオカサモチ・エゾノヨロイグサ

うこぎ科 タラノキ・ウド・ハリギリ(センノキ)・エゾウコギ・キ  
ヅタ

あかばな科 アレチマツヨイグサ・ヤナギラン・エゾアカバナ・メマツ

ヨイグサ

ぐみ科 アキグミ・ナツグミ

ひし科 ヒシ

すみれ科 ツボスミレ・タチツボスミレ・オオタチツボスミレ

またたび科 コクワ・マタタビ

しなのき科 シナノキ

ぶどう科 ヤマブドウ・ノブドウ・ヤブカラシ・ツタ

つりふねそう科 キツリフネ

かえで科 ベニイタヤ・イタヤカエデ・ハウチワカエデ

みつばうつぎ科 ミツバウツギ

にしきぎ科 ツルウメモドキ・マユミ・コマユミ・ヒロハノツリバナ

うるし科 ツタウルシ・ヤマウルシ・スルデ

つげ科 フッキソウ

とうだいぐさ科 エゾユズリハ・エノキグサ

かたばみ科 カタバミ・エゾタチカタバミ

みかん科 ヒロハノキハダ・ウチコミツルミヤマシキミ

ふうろそう科 ゲンノショウコ

まめ科 イユエンジュ・ヤブマメ・ミヤギノハギ・エゾギノハギ

エゾヤマハギ・ヤマハギ・クサフジ・ミヤコグサ・ナヨク

サフジ・シロバナ・シナガワハギ・ムラサキウマゴヤシ

クズ・アカツメグサ・シロツメグサ・ヌスビトハギ・ハリ

エンジュ・ニセアカシヤ

オオヤマザクラ・ヤマブキシウマ・ナナカマド・ダイコ

ンソウ・オオダイコンソウ・クマイチゴ(ヘビイチゴ)・

エゾイチゴ・キンミズヒキ・ノバラ・アズキナシ・オニシ

モツケ・ナガボノシロワレモコウ・キジムシロ・ミツバツ

チドリ

エゾアジサイ・エゾノリウツギ・トリアシシウマ・ネコ

ノメソウ・ゴトウツル(ツルアジサイ)

コンロンソウ・スカシタゴボウ・ハルザキヤマガラシ・エ

ゾノイヌナズナ・ヤマガラシ・オオバタネツケバナ・セイ

ヨウワサビ

もくれん科 ホオノキ・キタコブシ

けし科 エゾエンゴサク・クサノオウ

めぎ科 ルイヨウボタン

きんぼうげ科 ニリンソウ・キツネノボタン・キンポウゲ・フクジュソ

ウ・オクトリカブト・ヒメイチゲ・エゾイチゲ(ヒロハヒ

メイチゲ)・アキカラマツソウ・エゾシヨウマ(サラシナ

シヨウマ)・エゾノリュウキンカ(ヤチブキ)

かつら科 カツラ

まつも科 マツモ

すいれん科 コオホネ

なでしこ科 ウシハコベ・ハコベ・オオヤマフスマ

すべりひゆる科 スベリヒユ

やまごぼろ科 ヨウシユヤマゴボウ

ひゆる科 イスビユ・イノコヅチ

あかざ科 ウスバアカザ

たで科 ヒメスイバ・スイバ・スマダイオウ・エゾノギンギン・タ

チミチヤナギ・アキノミチヤナギ・インミカワ・ママコノ

シリヌグイ・タニソバ・ミゾソバ・オオミゾソバ・アキノ

ウナギツカミ・ソバカズラ・エゾノミズタデ・イヌタデ

オオイヌタデ・オオイタドリ

やどりぎ科 ヤドリキ

いらくさ科 エゾイラクサ・アカソ・オオバイラクサ・ムカゴイラクサ

くわ科 ヤマグワ

にれ科 ハルニレ・オヒョウ

ぶな科 ブナ・ミズナラ・カシワ・コナラ

かばのき科 エゾハシバミ・ミヤマハンノキ・エゾノシラカンバ・ハン

ノキ・アサダ・サワシバ

オニグルミ

くるみ科 オオバヤナギ・タチヤナギ・エゾキヌヤナギ・ドロノキ・

ヤマナラシ・セイヨウハコヤナギ(ホブラ)・シダレヤナ

ギ・エゾカワヤナギ・ウンリュウヤナギ・ヤマネコヤナギ

(バッコヤナギ)・エゾヤナギ

せんりょう科 ヒトリシズカ・フタリシズカ  
 どくだみ科 ドクダミ  
 じんちようげ科 エゾナニワズ(エゾオニシバリ)  
 もちのき科 イヌツゲ  
 ゆずりは科 エゾユズリハ  
 合弁花類

きく科 アキタブキ・ヤマハハコ・エゾヨモギ(オオヨモギ)・エ  
 ゾゴマナ・シラヤマギク・エゾノコンギク(野菊)・ユウ  
 ゼンギク・エゾノタウコギ・トキンソウ・エゾノキツネア  
 ザミ(サワアザミ)・チシマアザミ・ヒメムカシヨモギ・  
 ヒメジョオン・セイヨウタンポポ・オナモミ・メナモミ・  
 ジシバリ(イワニガナ)・アキノノゲシ・オオジシバリ・  
 コウゾリナ・オオハンゴンソウ・キタアザミ・オニノゲ  
 シ・アイノゲシ・ハチジョウウナ・ノボロギク・コガネギ  
 ク・オオアワダチソウ・セイダカアワダチソウ・ホクチア  
 ザミ・アメリカオニアザミ・ハハコグサ・オオアレチノギ  
 ク・ヨメナ・アキノキリンソウ・ヨツバヒヨドリ・ブタ  
 ナ・ヒヨドリバナ・ハンゴンソウ・セイヨウノコギリソ  
 ウ・シカギク・フランスギク  
 ききょう科 ツリガネニンジン・ツルニンジン  
 うり科 ミヤマニガウリ

おみなえし科 オミナエシ  
 あかね科 カワラマツバ・オククルマムグラ・クルマバソウ  
 おおぼこ科 ヘラオオバコ・オオバコ  
 ごまのはぐさ科 サギゴケ・オオイスノフグリ・タチイスノフグリ・エゾク  
 ガイソウ・ビロードモウズイカ  
 なす科 イヌホウズキ・ホウズキ・チヨウセンアサガオ・オオマル  
 バノホロシ・クコ  
 しそ科 ツルニガクサ・カキドオシ・チシマオドリコソウ・オドリ  
 コソウ・ミヤマトウバナ・イヌトウバナ・ウツボグサ・エ  
 ゾハッカ・ハッカ

むらさき科 キユウリグサ・エゾムラサキ(ミヤマワスレナグサ)  
 ひるがお科 ヒルガオ・ヒロハヒルガオ  
 ががいも科 ガガイモ・イケマ  
 りんどう科 ツルリンドウ・フデリンドウ・エゾリンドウ  
 もくせい科 ヤチダモ・イボタノキ・ハシドイ(ドスナラ)  
 さくらそう科 オカトラノオ・コナスビ・クサレダマ  
 のうぜんかずら科 キササゲ  
 はいのき科 サワフタギ  
 つつじ科 ムラサキヤンオ

△調査協力者村田武雄・監修北海道教育大学助教芳賀卓▽





(右上) ヒトリシズカ(せんりょう科)

(右中) ヒメイチゲ(きんほうげ科)

(右下) ヤナギラン(あかばな科)

(左上) ハクサンチドリ(らん科)

(左下) エゾノリュウキンカ(きんほうげ科)

(右上) キバナノアマナ(ゆり科)



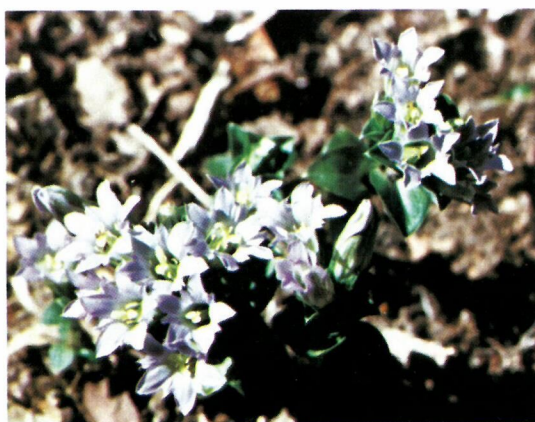
(右中) ノハナショウブの群生(あやめ科)



(右下) サルメンエビネ(らん科)



(左上) フデリンドウ(りんどう科)



(左下) ミズバショウ(さといも科)

